

東 山 5 遺 跡

—— 北海道縦貫自動車道岩見沢地区埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

昭 和 56 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

東 山 5 遺 跡

—— 北海道縦貫自動車道岩見沢地区埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

昭 和 56 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

序

本報告書は、北海道縦貫自動車道の建設にともない、岩見沢市内において昭和56年度に実施した、埋蔵文化財調査の概要を取録したものであります。

岩見沢市周辺は道内の穀倉地帯の一つで、石狩川の中流域に位置しております。今回調査を実施した遺跡は、夕張山地を東に望み、石狩平野を西に見渡す東利根別丘陵のほぼ中央部にあります。この丘陵の縁辺部あるいは河川沿いには、いくつかの遺跡が分布しており、このうちの一つ冷水遺跡^{ひやみす}は、昭和55年岩見沢市教育委員会によって調査されております。

明治時代になって、岩見沢市の周辺では農地の開拓、集治監の設置、炭鉱の開発によって急速な発展を遂げますが、今回の調査によりますと、今から約7,000年前の縄文時代早期の頃から人びとの営みのあったことが分りました。特に、縄文時代晩期の13基の墓が発見されたことは、その時代に、その付近に集落のあったことがうかがえるばかりでなく、狩りなどの日常生活が共同でなされていたことが想像され、興味尽きないものがあります。

この調査の成果が、学術関係者だけでなく社会教育や学校教育など、広く活用されることを期待するものであります。

発掘調査の実施にあたっては、日本道路公団札幌建設局、同岩見沢工事事務所の深い理解と協力があつたことを記して謝意を表するとともに、岩見沢市ならびに北海道教育庁空知教育局など調査に協力いただいた関係各位に御礼を申し上げる次第であります。

昭和57年3月

財団法人 北海道埋蔵文化財センター
理事長 浅井 理一郎

目 次

序

目次

巻頭図版

I	調査の概要	1
1	調査要項	1
2	調査体制	1
3	遺跡の概要	2
II	調査の方法	3
1	発掘調査の方法	3
2	整理の方法	6
III	遺構と遺物	11
1	縄文時代早期、中期、後期の遺構と遺物	11
2	縄文時代晩期の遺構と遺物	16
3	土器の集中、石鏃だけの集中、石鏃とスクレイパーなどの集中	25
4	石器等	33
IV	まとめ	48
	参考資料、参考文献	51



石鏃とスクレイパーなどの集中状態（P.30）

I 調査の概要

1 調査要項

事業名	北海道縦貫自動車道岩見沢地区埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	日本道路公団札幌建設局
事業受託者	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名	^{ひがしやま} 東山5遺跡
所在地	北海道岩見沢市東山町 261-3・4
調査期間	昭和56年4月1日～昭和57年3月31日
調査面積	5,710 m ²

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター	理事長	浅井理一郎
	業務部長	馬場 治夫
	業務部管理課長	小山内光之
	同 管理課主事	佐川 俊一
	同 経理課長	梅沢 祥真
	同 経理課主事	菅野 聡
	同 同 嘱託	石井 義男
	調査部長	藤本 英夫
	調査部調査第一班長	中村 福彦
	調査部調査第一班文化財保護主事	西田 茂
	同 同	浦辻 栄治

調査にあたっては、つぎの機関及び諸氏の御指導ならびに御協力を得た。

北海道教育庁社会教育部文化課	北海道教育庁空知教育局社会教育課
岩見沢市教育委員会	日本道路公団札幌建設局岩見沢工事事務所
東利根別用水管理組合	富水 慶一 工藤 幸衛

(敬称略)

3 遺跡の概要

岩見沢市は、石狩平野の中東部に位置し、その東は夕張山地に連なる丘陵地帯で、幾春別川・幌向川・利根別川などの河川が西南方向へ流れている。

遺跡は、この丘陵地帯の西端に、南北に長くのびる東利根別丘陵のなかほどにある(図1)。西流する東利根別川の右岸、標高40~60mの丘陵南斜面にあたる。今回調査したのは、東利根別川と、それにそそぐ小沢によってはさまれる丘陵の端部である(図2と3)。以前、畑地として耕作されていたときに土器、石器等が採集されている。調査時には、灌木、笹のはえた原野となっていた。地図から割りだした位置は、北緯43度10分15秒、東経141度47分49秒である。国鉄岩見沢駅の東南約2.7kmである。

岩見沢の開拓は、明治17年にはじまった。以後、耕地の拡大にともなって、土器、石器等の出土はあいついでおり、地図に示した遺跡が知られている(文献1と図1)。遺跡の多くは丘陵の斜面にみられる。発掘調査がおこなわれて詳細が明らかなのは、昭和55年夏に調査された冷水遺跡がある。縄文時代前期の尖底土器等が多量に出土している(文献2と3)。

東利根別丘陵は、昭和20年代前半の撮影になる空中写真では自然地形をよくのこしているが、市街地に近いこともあって、いたるところで宅地開発がおこなわれ、地形はかわりつつある。

調査区域における土層は、I、II、III層の三つに区分した。I層は表土(もとの耕作土を含む)で黒褐色土、厚さ10~30cm。II層は黒色土。本来の遺物包含層であるが、耕作や削平のためにごく部分的にしか残っておらず、残存するところでの厚さ5~20cm。このII層が残っていると、遺物は多くみられる。III層は、海成洪積層で、最上部は礫まじりの黄褐色粘質土である。遺構はこのIII層に掘り込まれている。

遺物は調査区域内にひろくみられ、土器片・石器・剥片・礫など約4,500点出土したが、磨耗したもの、破損したものが多し。標高45mよりも低く傾斜のゆるやかなところに、遺物の密度は高い。時期の判明したものとして縄文時代早期、中期、後期、晩期の遺物がある。土器型式としては、東釧路III式、円筒上層式、北筒式、余市式、鳩山式などがある。縄文時代早期と推定される魚骨回転文土器も出土している。

遺構としては、中期の土壇1か所、晩期の土壇13か所、遺物の集中3か所を検出した。晩期の土壇は、M-0区に10か所、N-3区に3か所、それぞれまとまっている。晩期と考えられる第13号土壇では、墓鎮石(はかしずめの石)とでも称すべき石のまわりに、土器2個体分の破片がみられた。この土壇の中にあつた木炭片のC₁₄年代はBP2,710±120(KSU-448)である。遺物の集中地区からは、3個体分の土器、石鏃ばかり43点以上、石鏃とスクレイパーなど20点以上がそれぞれまとまった状態で検出された。これらは縄文時代晩期終末の遺物と思われるが、墓塚の副葬品とは考え難い出土状態である。

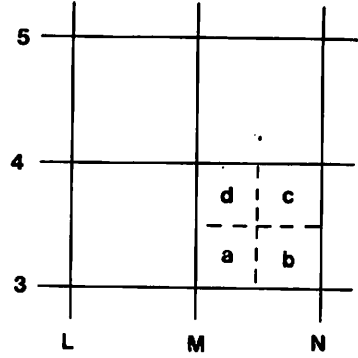
調査区域の南西端に幅2mほどの農業用水路があつて、土壇の多く検出されたところに接している。水路工事のとき、消滅した土壇があつたかもしれない(図3)。なお、畑地での遺物の散布状態から考えて、遺跡は調査区域の東側にひろがるものと予想される(図2)。

II 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 発掘区の設定

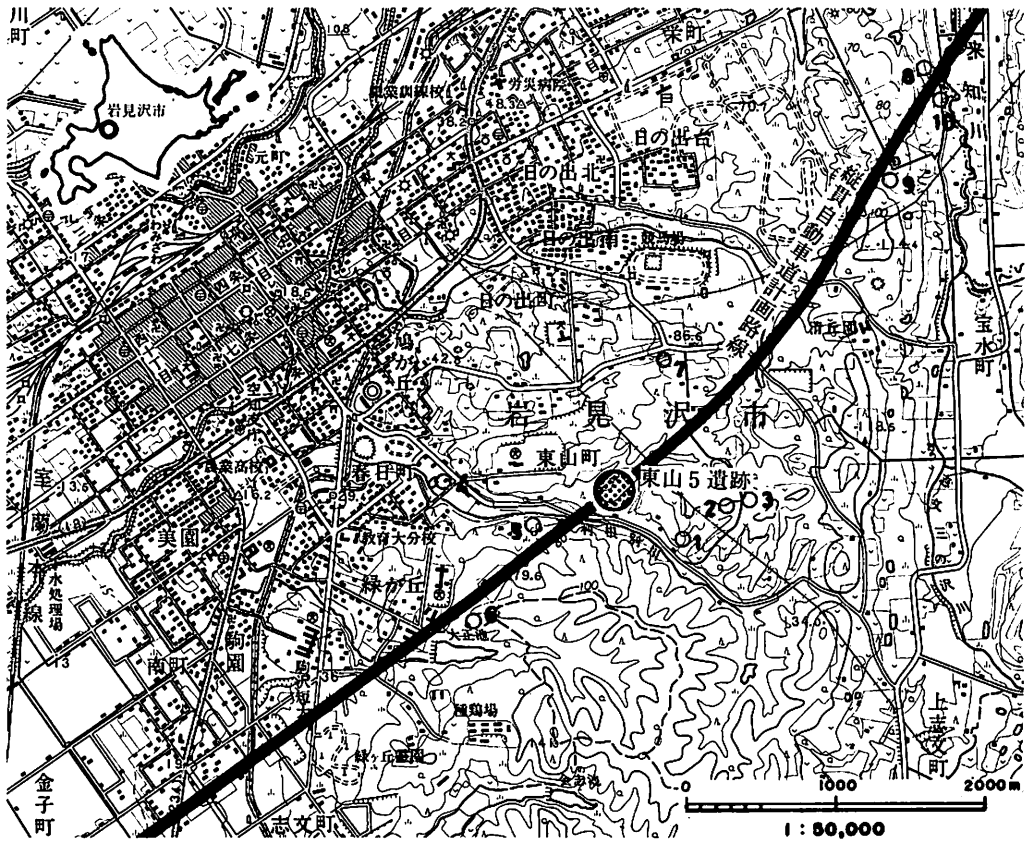
発掘区の設定にあたっては、工事路線の中心線を基準とし、これを縦軸、これに直交する線を横軸とした。縦・横とも 10 m 間隔に分割線を設け、横線には算用数字、縦線にはアルファベットを付した (図 3)。これによってできた 10 m 方眼を大発掘区と呼び、さらにこれを 5 m × 5 m に四分分割し、逆時計まわりに a、b、c、d と表示したものを、小発掘区と呼ぶ。たとえば M-3-a と記す。



グリッドの表示

(2) 事前調査の結果と調査のねらい

当埋蔵文化財センターが昭和 55 年秋におこなった、試掘調査によってとらえられた遺跡の状態は次のようなもので



1. 東山遺跡 2. 東山2遺跡 3. 東山3遺跡 4. 東山4遺跡 5. 東山6遺跡
6. 大正池遺跡 7. 孫別遺跡 8. 野々沢A遺跡 9. 野々沢B遺跡 10. 野々沢C遺跡

(この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図「岩見沢」を複製したものである)

図1 東山5遺跡と周辺の遺跡の位置

あった。

- ① 土器片は少ない。磨滅したものがほとんどで、形式的な特徴から時期を推定できるのは、続縄文時代のものと思われる数点だけである。
- ② 石斧・石槍・石鏃など出土しているが、その点数は少ない。剥片等は、密度はひくい、調査予定地に広く分布している。
- ③ 遺物包含層は、5～40 cmの厚さで、削平されたところもある。以前、畑地であったところでは、プライマリーな包含層は、部分的に残っているにすぎない。
- ④ 土壌を2か所確認している。そのうちのひとつは径0.8 mの円形であることから、続縄文時代の墓壇の可能性が考えられる。

以上をもとにして、調査のねらいを次の二点においた。

- ① 続縄文時代の墓壇と予想されるものは、他の遺跡例からして墓壇群をなす可能性がある。調査にあたっては詳細に記録し、埋葬状態の復元につとめるとともに、集落との関連も充分考慮する。
- ② 砥石、石斧、石鏃、石槍、剥片など縄文時代に属すると思われる遺物が出土しているので、時期の確定、遺物の「まとまり」の把握につとめる。

(3) 調査の期間と方法

発掘調査の期間は、7月1日から8月22日までである。調査区域は、灌木、笹の原野になっ



遺跡周辺の空中写真（この写真は国土地理院発行の1/10,000の空中写真を複製したものである）

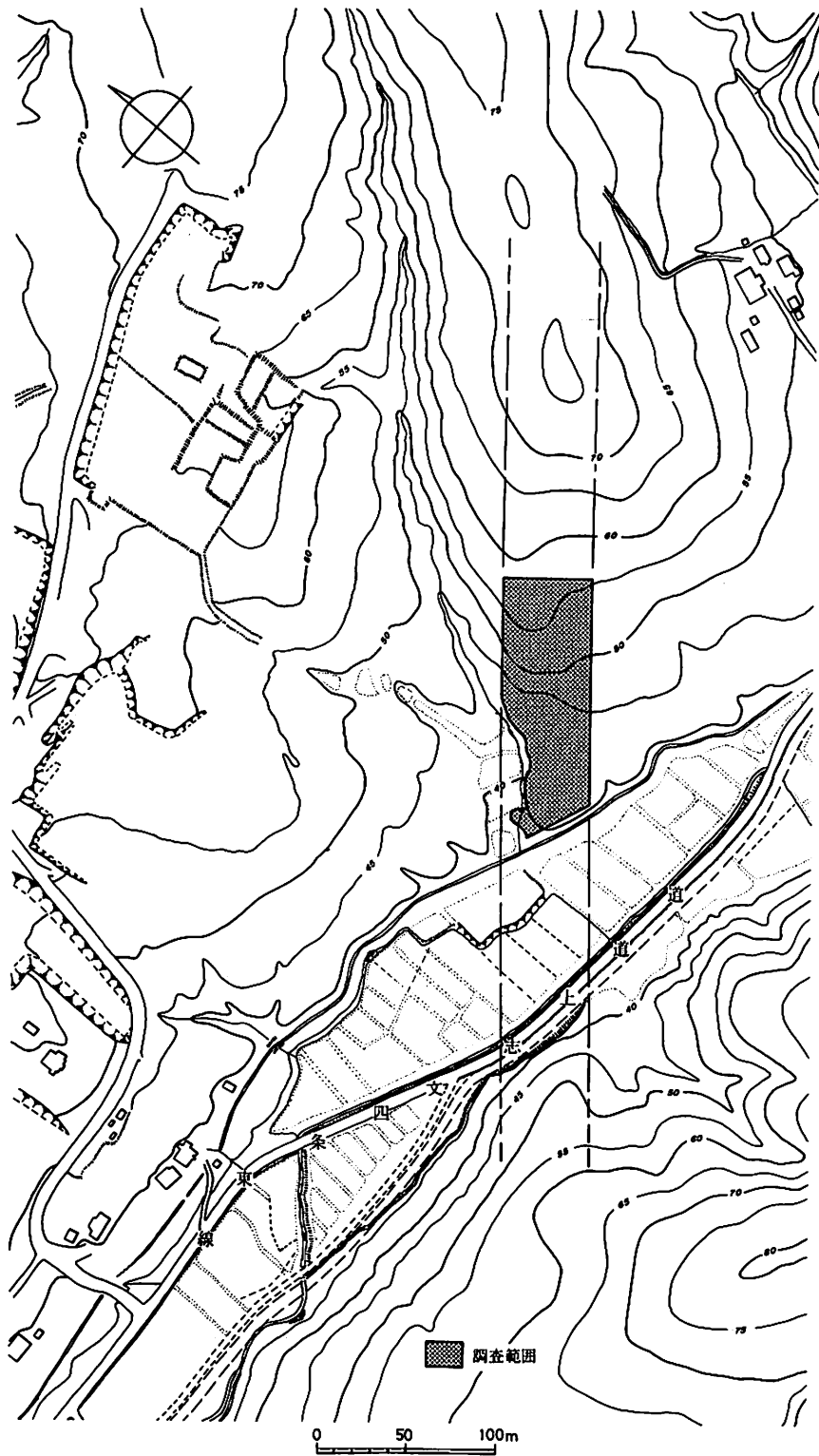


図2 東山5遺跡の周辺地形

ていたので、ブルドーザーを使って表土の除去をおこなってから、手掘り調査をおこなった。

(4) 遺物のとりあげ

土器、石器、剥片、遺物と認められる礫等は、5 m×5 mの小発掘区ごとに一連の番号を付してとり上げた。個々の遺物の出土地点の記録化につとめ、ほとんどのものを記録してある。

(5) 遺構の調査

確認したプランに任意の半割線をもうけ、その一方を土層の状態を検討しながら掘り下げた。遺物の出土状態、土層の状態は図・写真等に記録した。

2 整理の方法

野外調査と並行して、現地で遺物の水洗、注記（発掘区と遺物収集番号）を行なった。9月から3月まで、遺物の分類・計測、土器の接合・復原、土器・石器の実測・製図、記録類の整理を行ない、あわせて報告書を作成した。なお、破損した遺物の測定値は（ ）で示した。

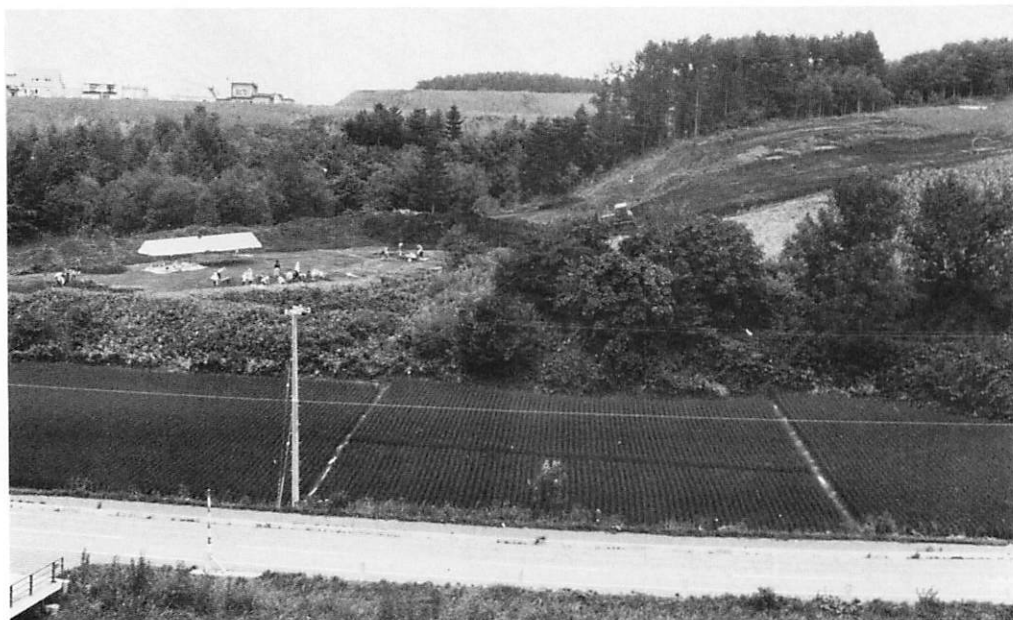
(1) 遺物の分類

遺物の分類は、当埋蔵文化財センターの分類規準によった。土器については、縄文時代早期に属する資料をI群とし、以下順次、前、中、後、晩期を、II群、III群、IV群、V群としている。今回出土したのは、I群b-1類の東釧路III式に相当するもの、III群a類の円筒上層式に相当するもの、III群b-3類の北筒式に相当するもの、IV群a類の余市式に相当するもの、V群C類の鳩山式などである。なお、石器については33ページに記した。

(2) 遺物および記録類の収納方法

① 遺物の収納

報告書掲載資料とその他の資料とに区分し、遺構別、発掘区別に収納。プラスチック・コン



東山5遺跡の遠景

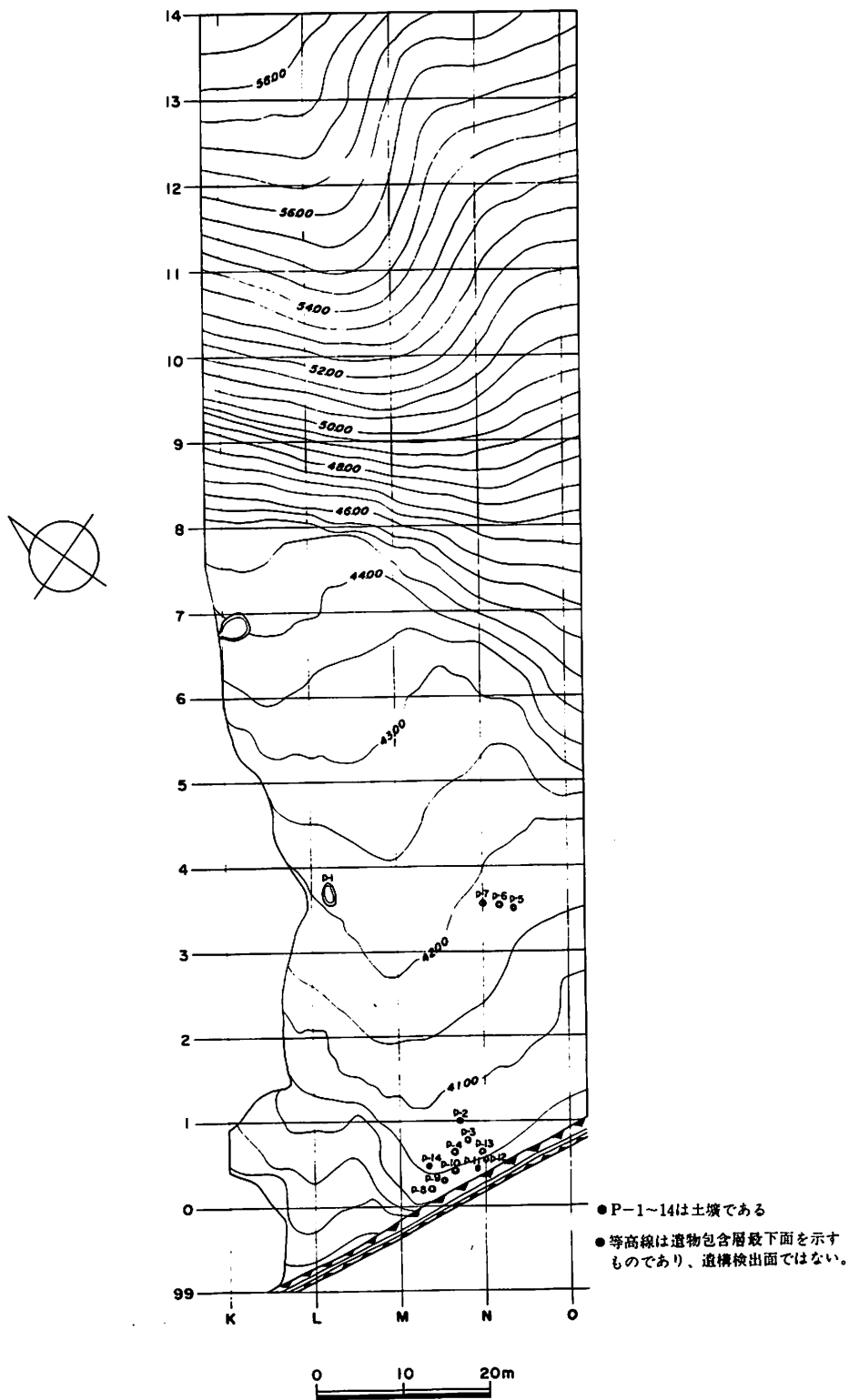


図3 グリッドの設定と遺構の位置

テナ（約 40 cm×60 cm で深さ 15 cm）に詰め、遺物収納台帳（索引簿）を付して、遺物台帳、遺物カードと一括保管。

㊤ 記録類の収納

遺構図等の実測図類は、素図作成後マイクロ・フィルムとし、アバチュア・カードを作成して収納保管。製図原本は報告書の印刷原稿として使用。

写真類は、フィルム台帳、写真索引カードを添付して所定のケースに収納。

なお、調査終了後は遺物および記録のすべてを、北海道教育庁文化課に提出する予定である。

付1 東山5遺跡のあたりの開拓は、明治36年の藤沢甚右衛門にはじまるという。開拓の初期かと考えられる木炭焼窯も検出した（図4）。

付2 発掘調査にあっていた8月3～5日の3日間にわたって400mmを超す雨が降った。記録的な豪雨で500年に一度の雨という。調査の進行に多大の影響があったが、予定どおり終了することができた。

付3 本書に用いた方位は、すべて磁北を示している。

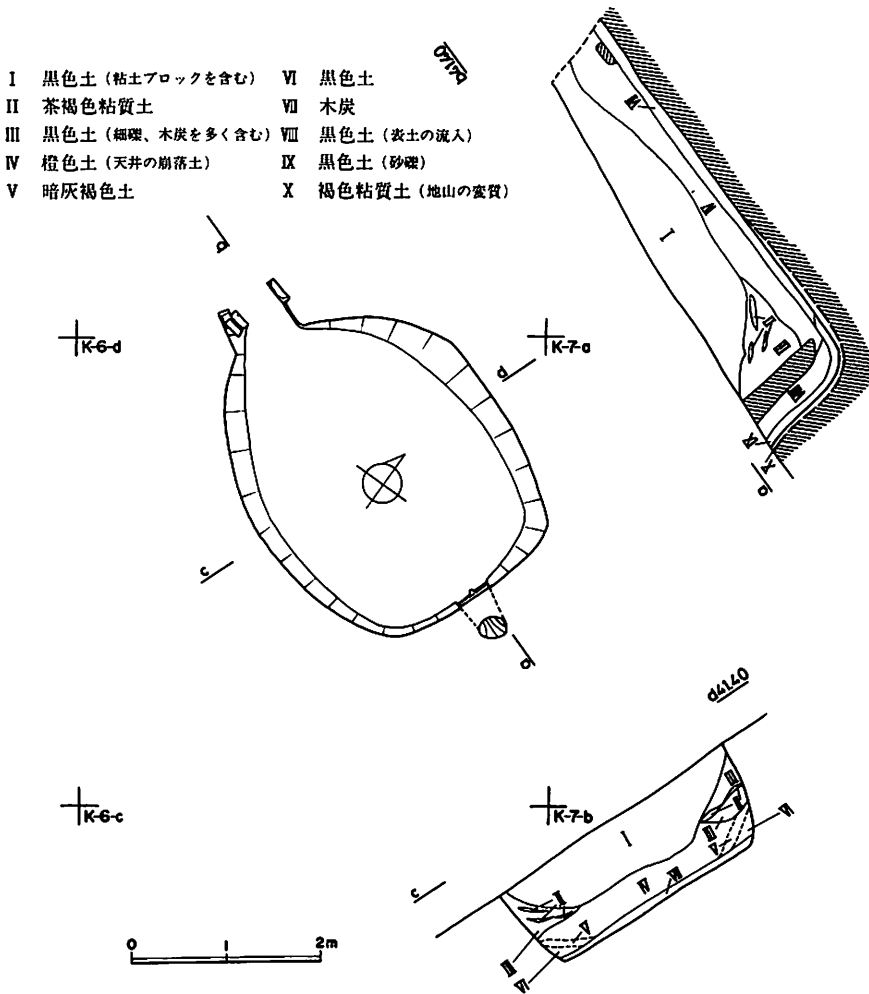
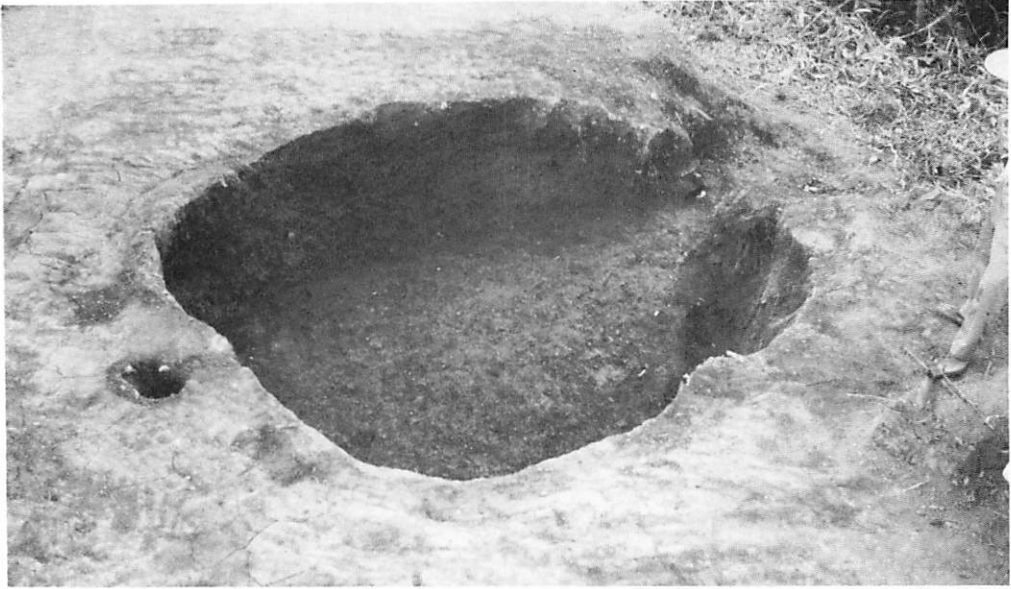


図4 木炭焼窯跡



木炭燒窯跡



作業風景

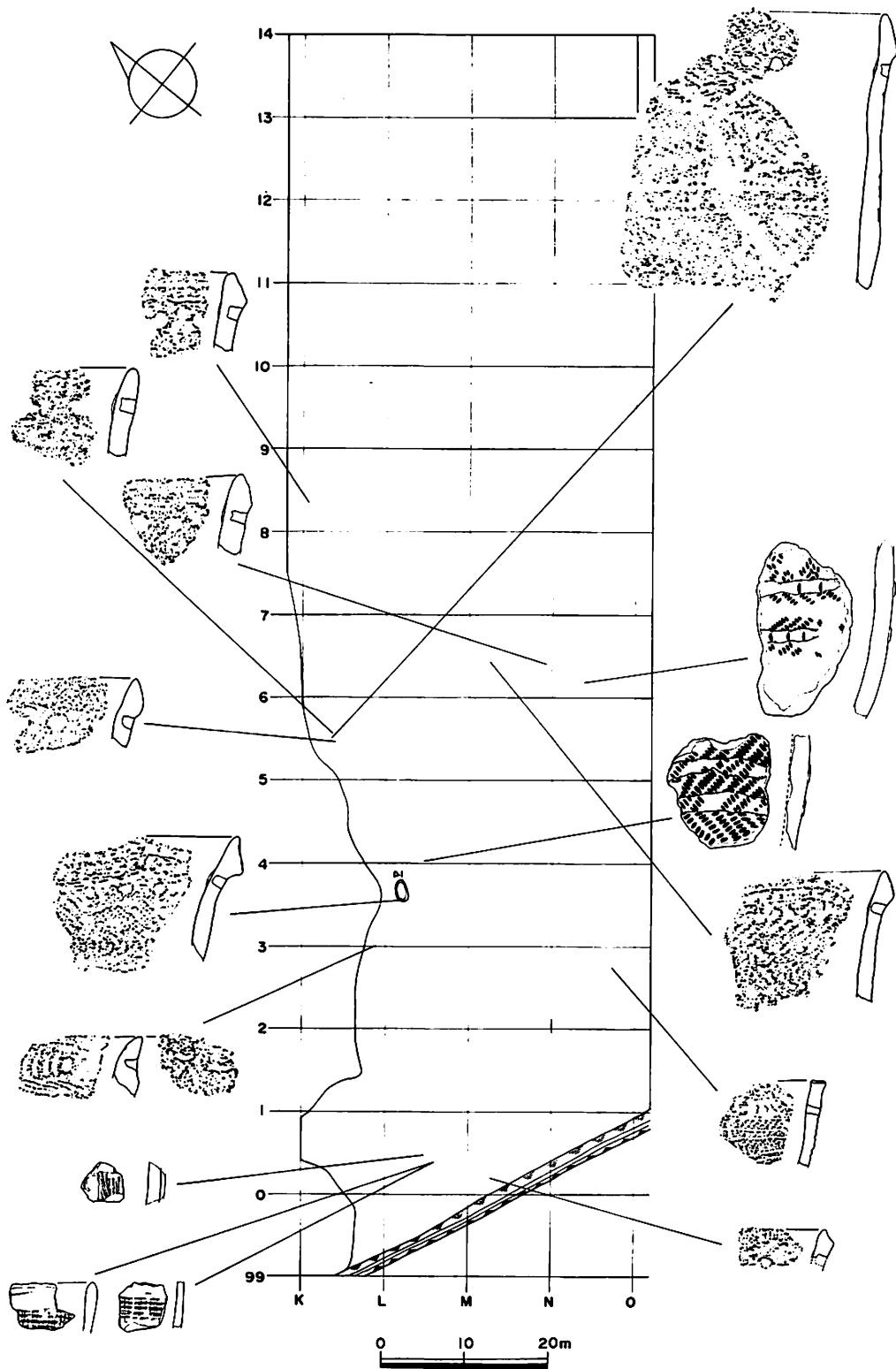


図5 縄文時代中期の遺構と早期・中期・後期の土器位置

III 遺構と遺物

1 縄文時代早期、中期、後期の遺構と遺物（図5）

(1) 縄文時代中期の遺構

第1号土塋（図6と7）確認面での長径3.0m、短径1.84m、深さ0.23m。

遺物の出土位置は図6に、土器は口印で、剥片、碎片などは▲印で示した。土器の1と石器の2は黒色土のなかほどから、石器の3は底面ちかくから出土している。土器で特徴のわかるものは、1の北筒式土器の口縁破片のみである。他の6点は小さな破片で、型式の推定は困難である。石器の2は黒曜石を素材とする両面加工の槍先またはナイフで、重さ33.2gである。石器の3は、一部に礫表皮を残す黒曜石の縦長剥片を素材とするドリルで、重さ2.0gである。

(2) 縄文時代早期、中期、後期の土器（図8）

早期の土器としては、東釧路Ⅲ式（タンネトウE式）（3, 4, 5）1個体分と魚骨回転文土器1個体分（1, 2）である。ともにL-0区のせまい凹地で検出された。いずれも、小さな破片ばかりで、器形を復原するにはいたっていない。

中期の土器としては、円筒上層式の小破片（6, 22）、北筒式の破片（7~21, 23~25）がある。円筒上層式の口縁部小破片は、L-0区のせまい凹地で検出された。北筒式は、0区から9区にわたって、ひろくみられる。7~12は口縁部あるいは頸部にへらによる押し引きがみられ、18, 19には爪形文がみられる。後期の土器としては、余市式の破片（26）がある。

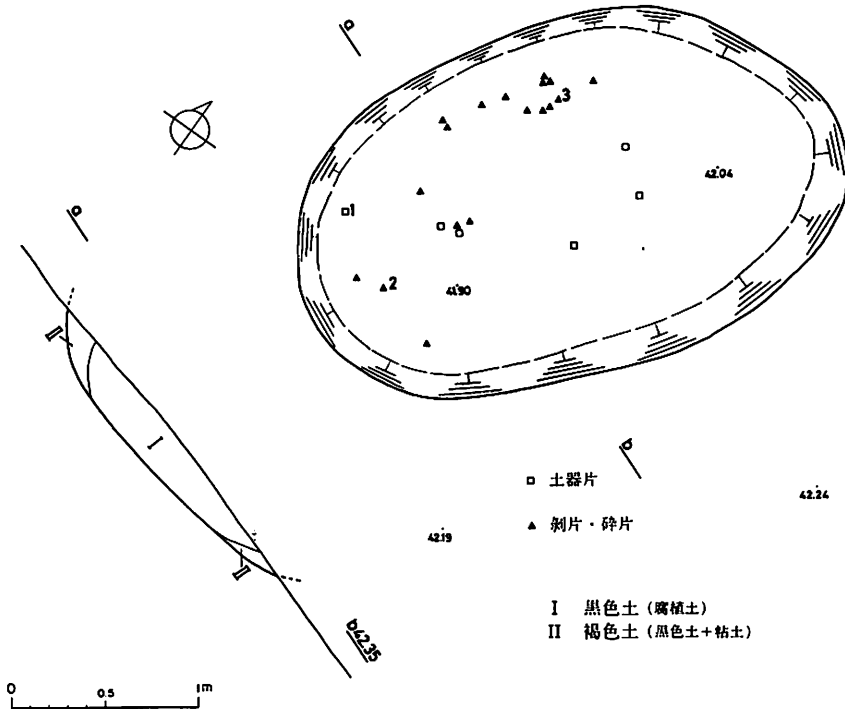


図6 縄文時代中期の遺構 第1号土塋

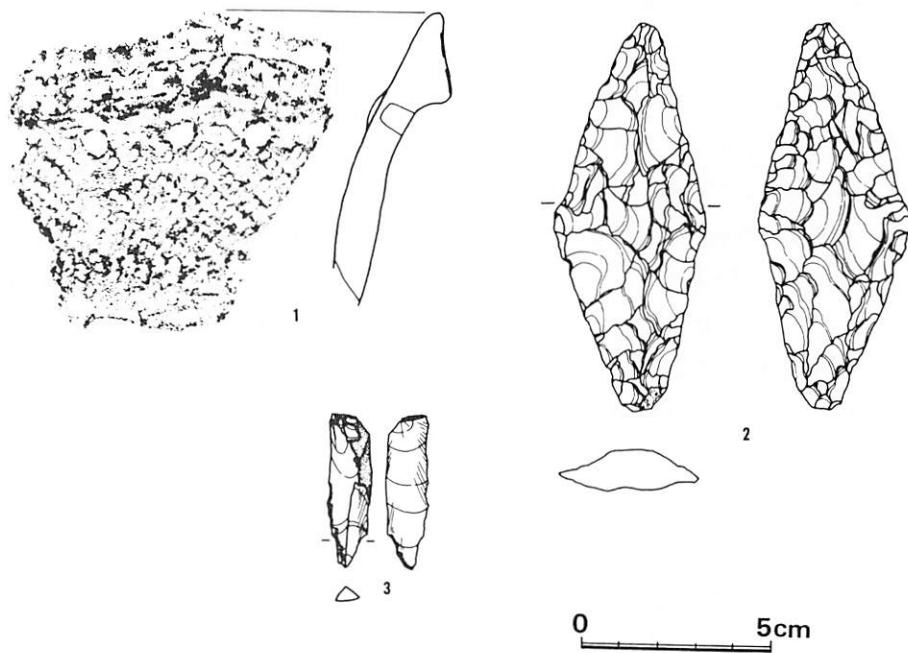
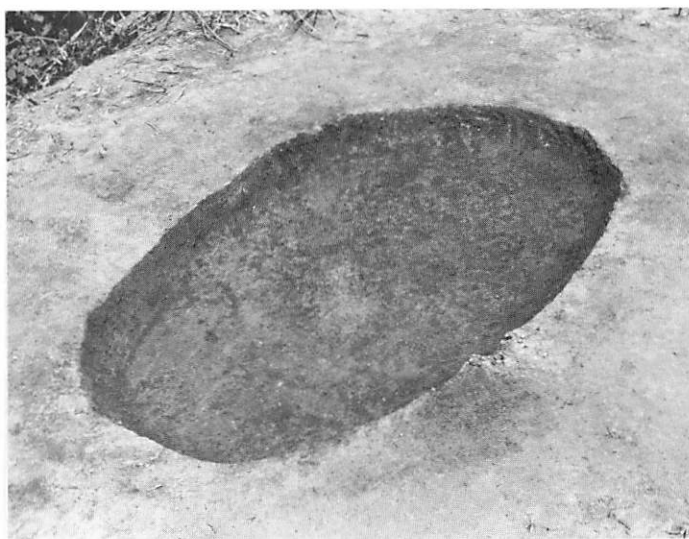
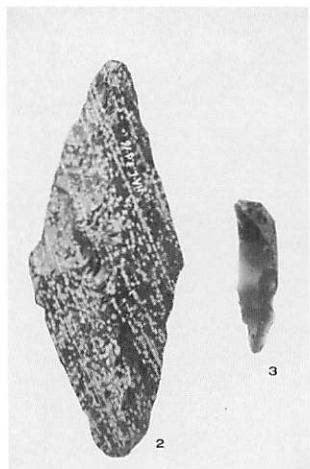


図7 第1号土壙の遺物



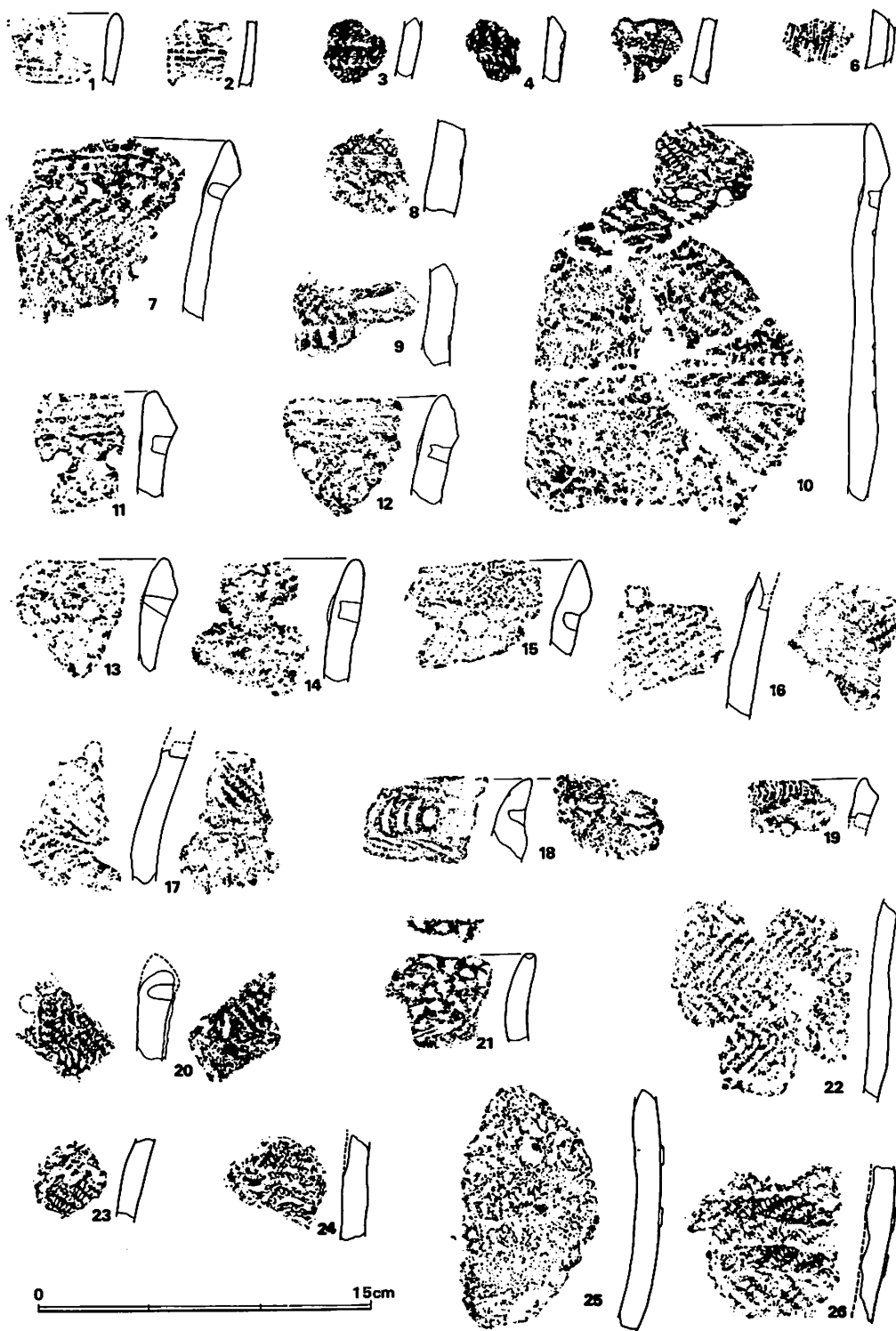
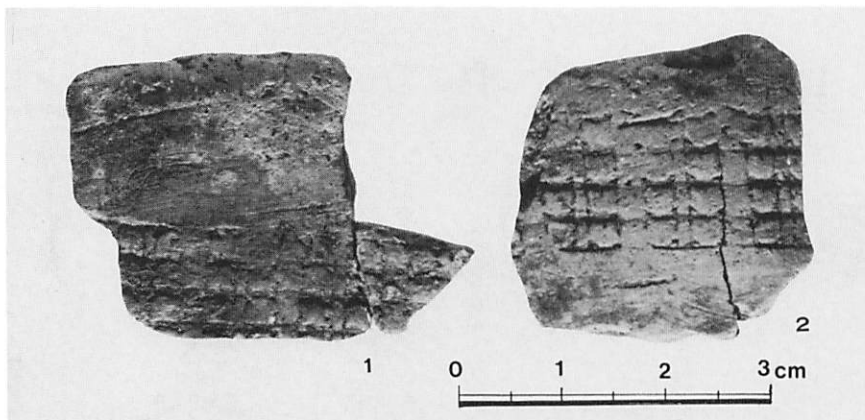
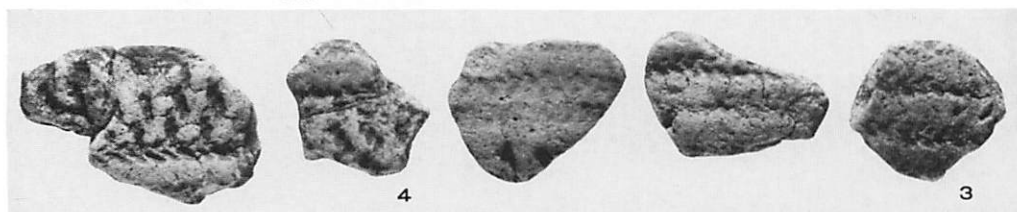


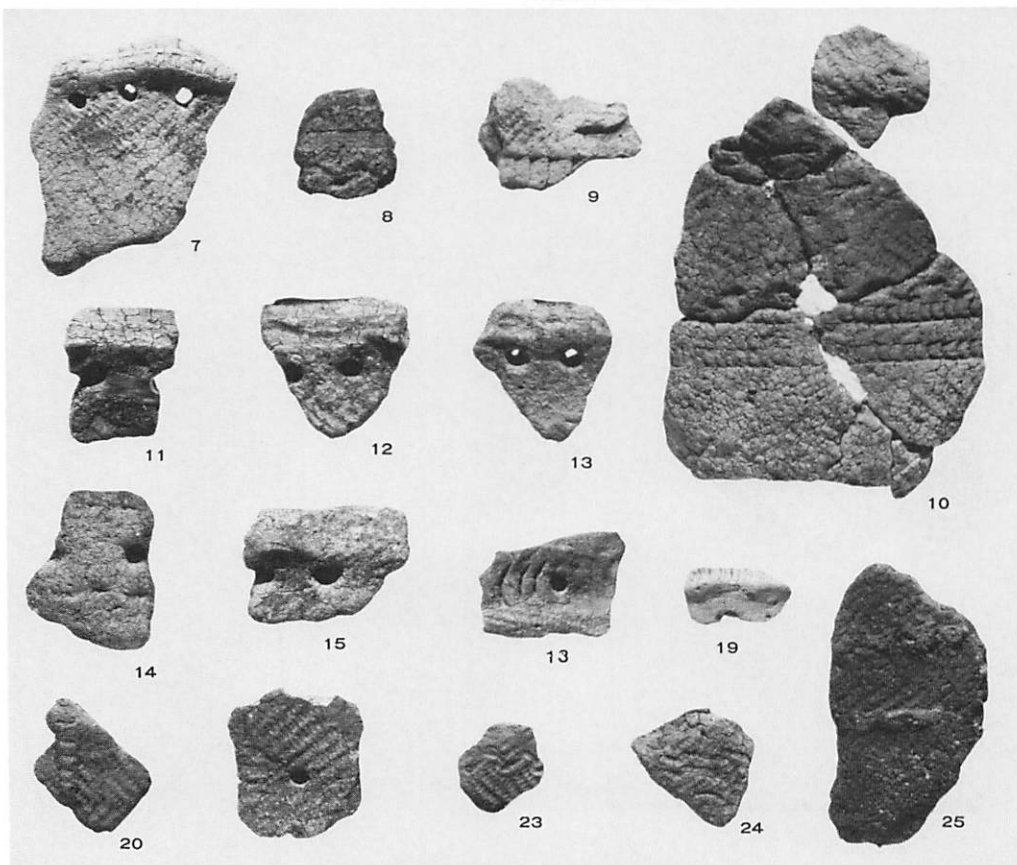
図8 縄文時代早期・中期・後期の土器



魚骨回転文土器

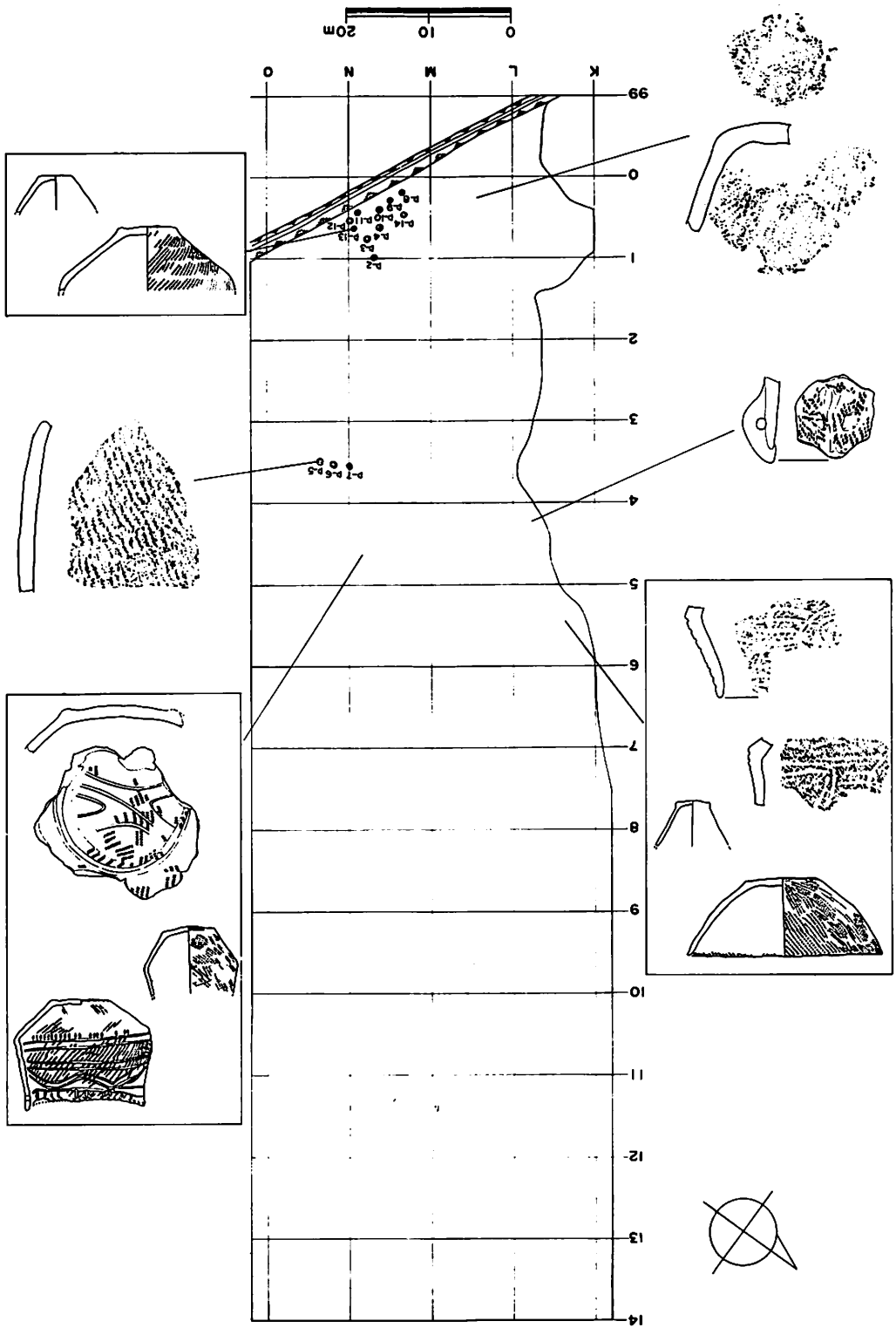


東釧路III式土器



縄文時代中期・後期の土器

図9 縄文時代晩期の遺構・遺物の位置



2 縄文時代晩期の遺構と遺物 (図9～23)

(1) 遺構 (図10～22)

第2号～第14号の13か所の土壙を検出できた。10か所はM-0区に、3か所はN-3区にまとまっている (図9)。時期の決め手となる遺物は第13号土壙と第5号土壙から出土した土器片だけで、ともに縄文時代晩期後葉のものである。他の土壙には出土遺物がなく、時期の確定は難しいが、規模や形態、埋め戻しの状態等が類似していることから、ほぼ同一時期のものと推定した。

(2) 土器 (図23)

1は対になる「吊り耳」のひとつである。2と3は同一個体と思われ、器形は、ソロバン玉形の小形の鉢であり、地文にはLRの単節斜行縄文がみられる。4は器形を知りうる数少ない土器のうちのひとつである。浅鉢で、底部もふくめて外面いっばいにRLの斜行縄文が施され、口縁の内側にも縄文がみられる。5は、底部に張り出しがあるやや丸底の無文土器である。2～5の3個体の土器は、近接して検出されており、「土器の集中」であった可能性がある。6と7は舟形土器の長軸方向の口縁部破片である。8と9は口縁部のちかく、10と11は口縁部の破片である。12～16は、磨耗がいちじるしい底部破片であるが、ともに縄文がみられる。写真の17は続縄文時代の土器の底部である。続縄文時代の土器として示せるものは、これだけであるので、ここに示しておく。

第2号土壙 (図10)

確認面の径0.8 m、底径0.73 m、深さ0.27 m、覆土は小さな礫を多く含んでいた。覆土下部には黒曜石の剥片2点、底面からはこぶし大の礫11個、それよりも小さな礫2個が出土している。層位はI層 黒色土、II層 黄色土(粘土のブロック)である。試掘調査のとき墓壙の可能性を推定していたものである。

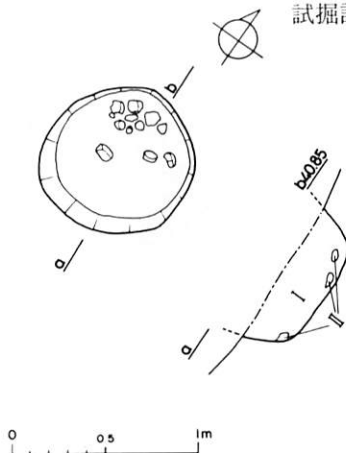


図10 第2号土壙



第3号土壇 (図11)

確認面の径0.90 m、底径0.83 m、深さ0.32 m、覆土には小さな礫を多く含んでいた。底面にはこぶし大の礫11個、それよりも小さな礫6個、壁ぎわには小さな磨耗した土器片が出土している。南側には小さな「段」がみられる。層位はI層 黒色土、II層 黄褐色土(黒色土と粘土まじり)である。

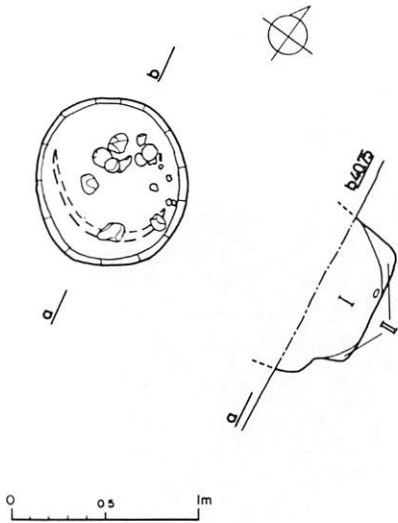


図11 第3号土壇

第4号土壇 (図12)

確認面の径0.67 m、底径0.58 m、深さ0.29 m、底面にこぶし大の礫10個が出土している。西側には、一部攪乱を受けたところがある。層位は、I層 黒色土、II層 褐色土(黒色土と粘土まじり)である。

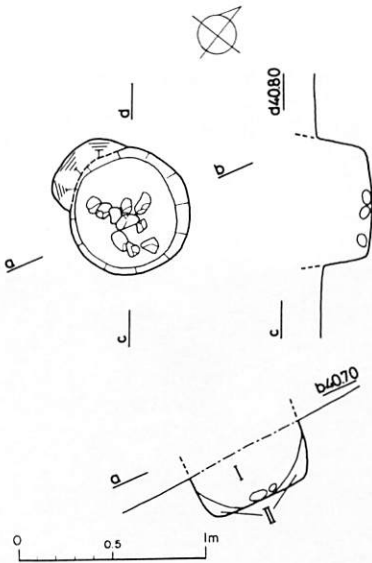
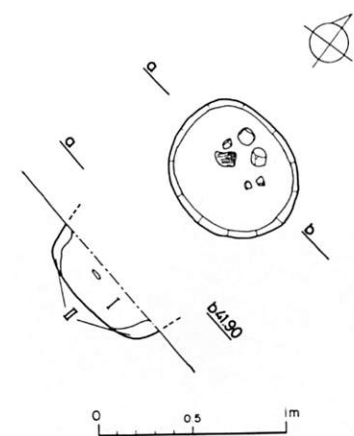


図12 第4号土壇

第5号土壙 (図13)

確認面の径0.75 m、底径0.68 m、深さ0.22 m、覆土のひくいところから図の土器片が、底面ちかくからは、こぶし大の礫2個、それよりも小さな礫3個が出土している。土器の表面にはRLの単節斜行縄文がみられる。層位は、I層 黒色土、II層 褐色土(黒色土と粘土まじり)である。



0 5cm

第5号土壙の遺物

第6号土壙 (図14)

確認面の径0.71 m、底径0.60 m、深さ0.20 m、底面にこぶし大の礫21個が出土している。層位はI層 黒色土、II層 褐色土(黒色土と粘土のまじり)である。

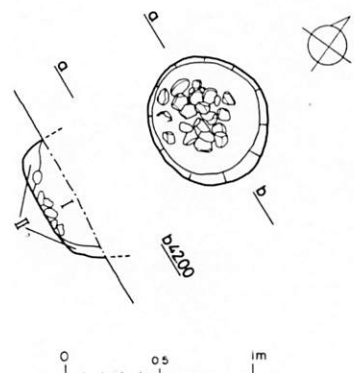


図14 第6号土壙

第7号土坑 (図15)

確認面の径0.71 m、底径0.65 m、深さ0.36 m、風倒木痕が形成された後に掘り込まれている。底面付近の7.2 kgの大きな礫のまわりに、こぶし大の礫が7個、さらにそれらより小さな礫9個が出土している。層位は、I層 黒色土、II層 褐色土 (黒色土と粘土まじり) である。

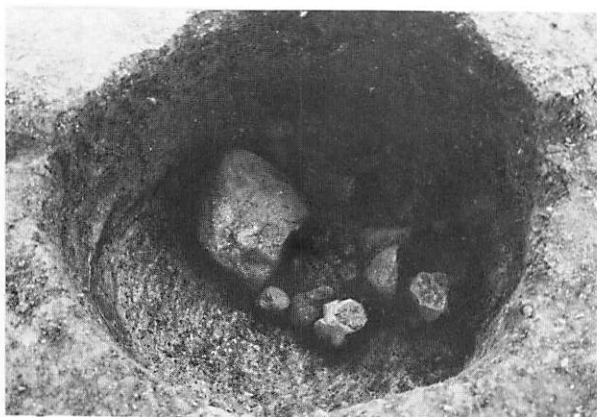
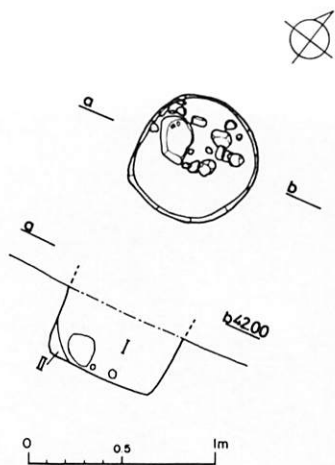


図15 第7号土坑

第8号土坑 (図16)

確認面の径0.73 m、底径0.66 m、深さ0.29 m、写真ではみられないが、底面からこぶし大の礫5個が出土している。層位はI層 黒色土、II層 黄褐色土 (黒色土と粘土ブロック) である。

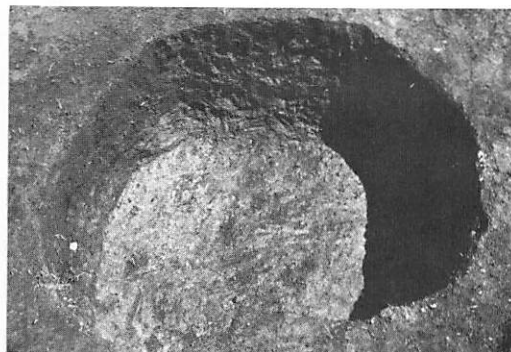
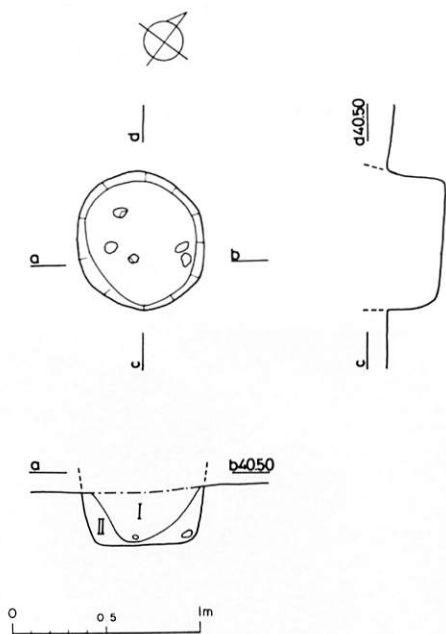


図16 第8号土坑

第9号土壙 (図17)

確認面の径0.70 m、底径0.64 m、深さ0.13 m、底面からこぶし大の礫が2個出土している。層位は、I層 黒色土、II層 褐色土(黒色土と粘土まじり)である。

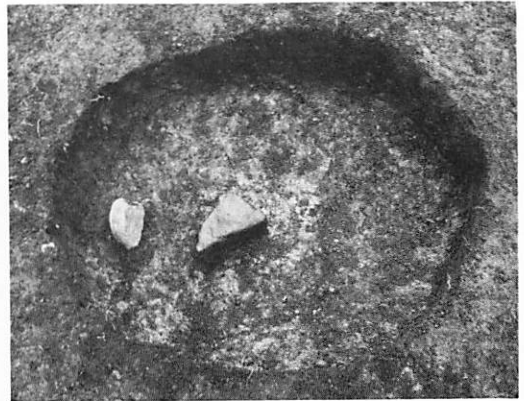
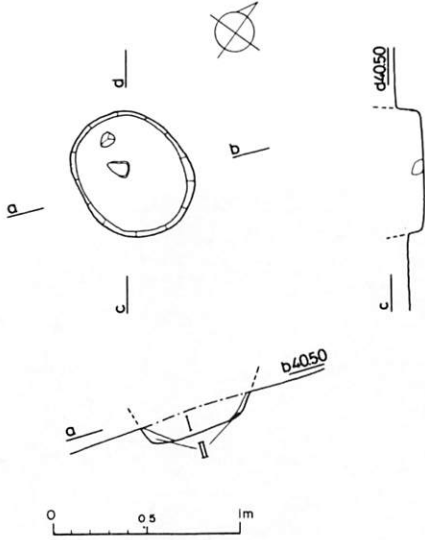


図17 第9号土壙

第10号土壙 (図18)

確認面の径0.72 m、底径0.61 m、深さ0.34 m、底面からこぶし大の礫2個、それよりも小さな礫1個が出土している。層位は、I層 黒色土、II層 褐色土(黒色土と粘土ブロック)である。

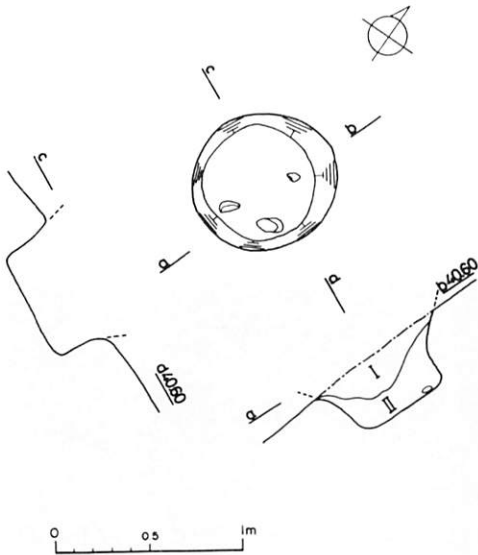


図18 第10号土壙

第 11 号土壇 (図 19)

確認面の径 0.54 m、底径 0.47 m、深さ 0.26 m、覆土には小さな礫をふくんでいたが、底面には遺物はなかった。層位は、I 層 黒色土、II 層 褐色土(黒色土と粘土まじり)である。

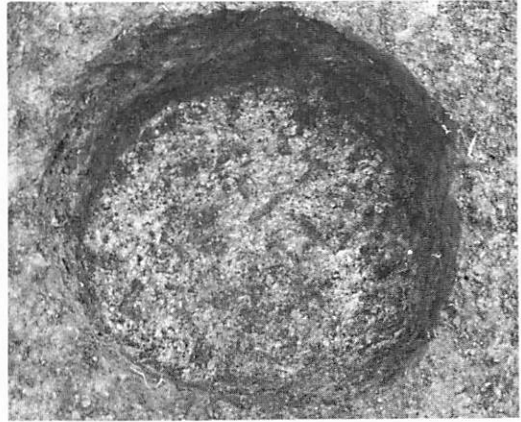
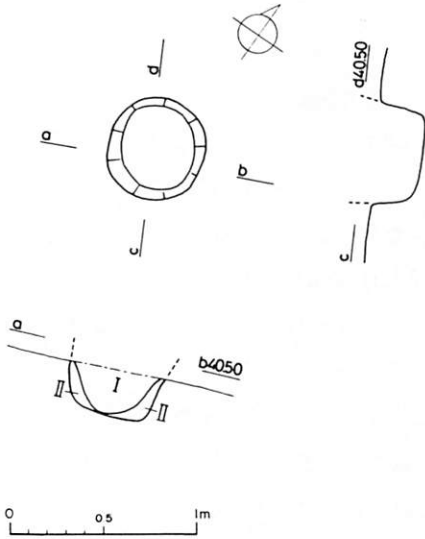


図 19 第 11 号土壇

第 12 号土壇 (図 20)

確認面の径 0.59 m、底径 0.50 m、深さ 0.19 m、底面からこぶし大の礫 1 個、それよりも小さな礫 1 個が出土している。層位は、I 層 黒色土、II 層 褐色土(黒色土と粘土まじり)である。

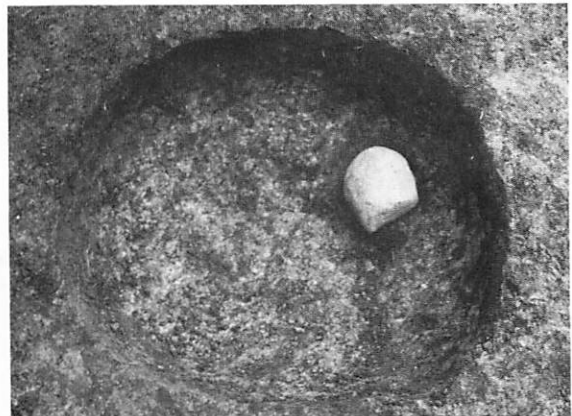
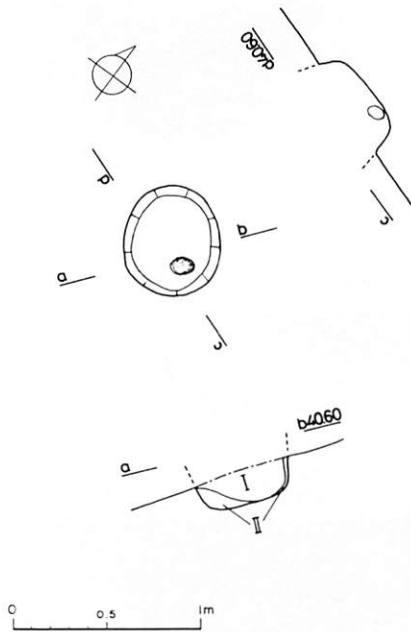


図 20 第 12 号土壇

第13号土壙 (図21)

確認面での径0.7 m、底径0.6 m、深さ0.35 m、底面ちかくの墓鎮石と考えられる12.7 kgの礫のまわりに、こぶし大の礫5個

と2個体分の土器破片が出土した。復原した土器は1と2である。1は破片53,59,61,62からなる表面に文様のみられないもので、口縁部は接合できなかった。2は破片51,54,56,60,65からなる底部もふくめてほぼ全面に斜行縄文がみられるもので、口縁部を欠いている。縄文時代晩期後葉に位置づけられる。なお、破片に記入した番号は注記してある番号と同じである。

土器片の出土状態からみると、2個体分の土器は打ちわられて大きな礫のまわりにおかれたものと思われる。層位はI層 黒色土、II層 灰色土、III層 茶褐色土、IV層 黄褐色土である。

木炭片のC₁₄年代はB.P.2,710±120で、土器編年による推定年代よりも古い値である。



図21 第13号土壙



第13号土壇

第14号土壇（図22） 確認面の径0.53m、底径0.49m、深さ0.16m、覆土には小さな礫をふくんでいたが、底面に遺物はなかった。層位は、I層 茶褐色土、II層 黒色土、III層 褐色土である。

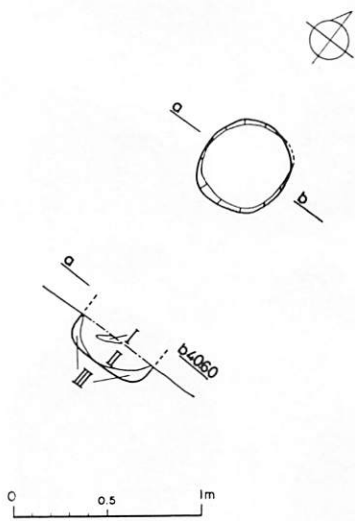


図22 第14号土壇



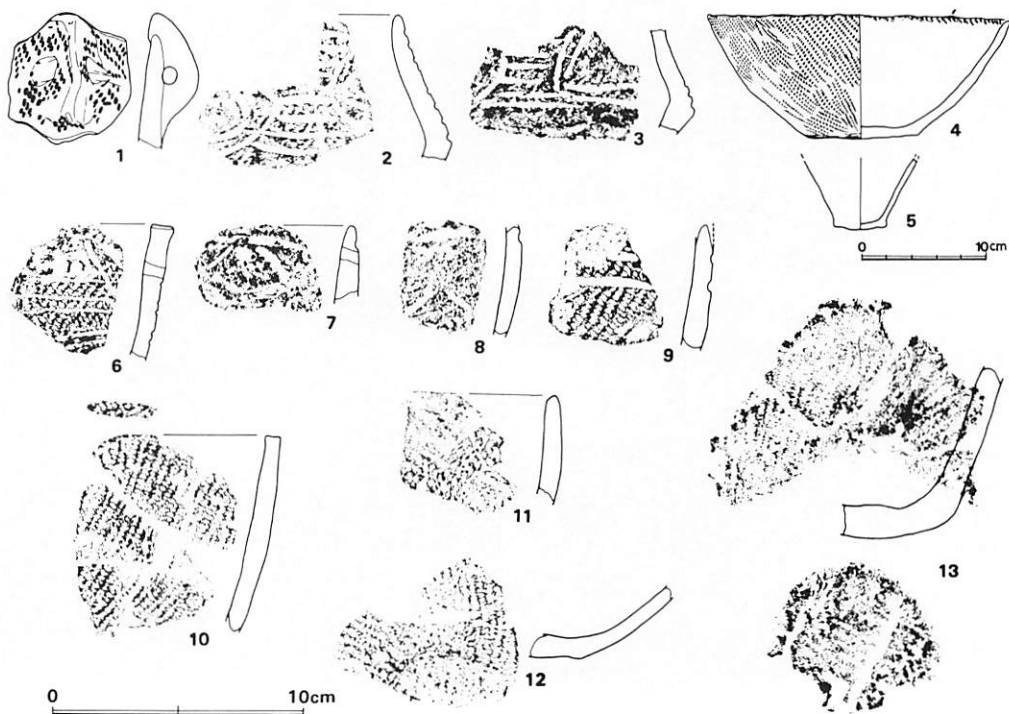
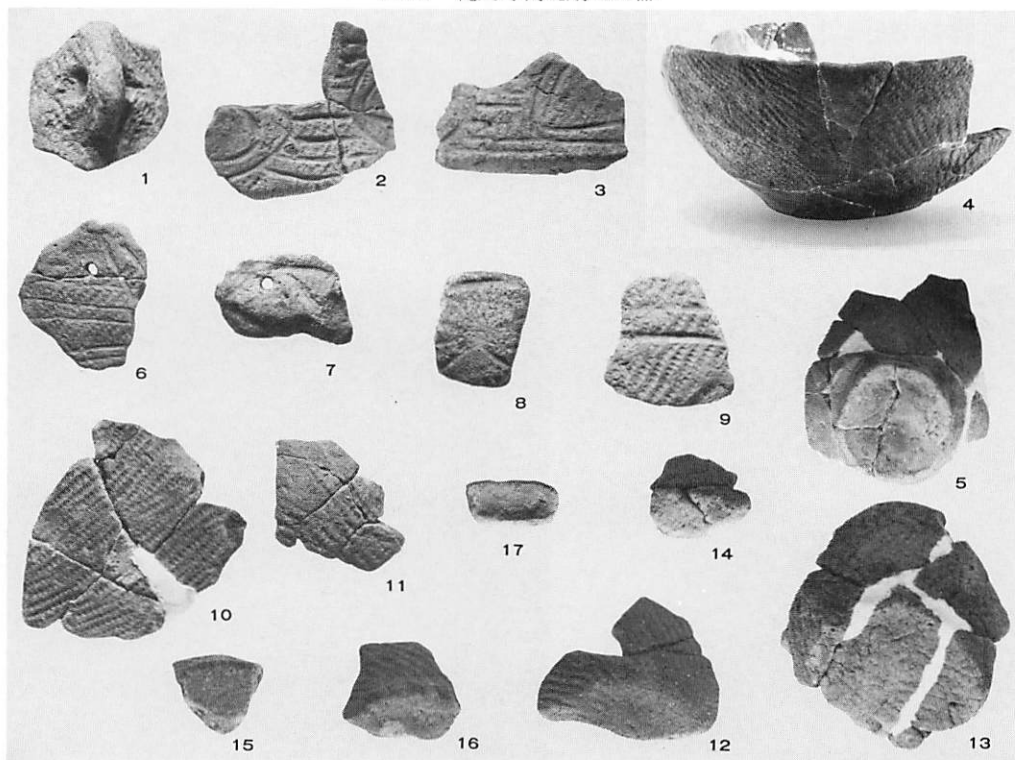


図 23 縄文時代晩期の土器



3 土器の集中、石鏃だけの集中、石鏃とスクレイパーなどの集中 (図 24~30)

M・N-4 区に、土器の集中、石鏃だけの集中、石鏃とスクレイパーなどの集中がみられた(図 26)。

○ 土器の集中は、3 個体分の破片である(図 24,25)。1 は、底部破片である。全体に磨耗がいちじるしく、不明瞭ではあるが、沈線による文様がみられる。2 は、口縁部を欠くが、器形を推定すると、上面が楕円形で、横面がソロバン玉形になる。底面もふくめて、全面に斜行縄文がみられる。3 は長軸の両端に孔があり、舟形土器と呼ばれるものである。胴部下半には斜行縄文の重なりがみられ、底面にも斜行縄文がある。

○ 20 cm 四方の範囲から石鏃 43 点以上が、まとめて出土した(図 27,28)。そのうち 26 点については実測図で示し、のこりはパラフィンと石膏で固めてとりあげてある。のこりの 17 点以上は、横立ちのものが多く、11 cm×5 cm の範囲におさまっていることから、これらの石鏃

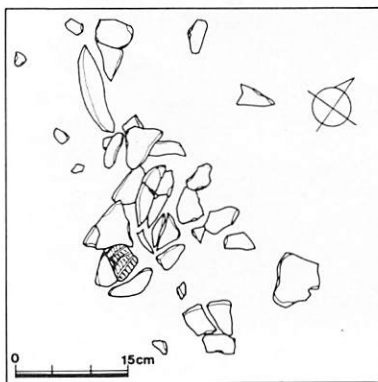
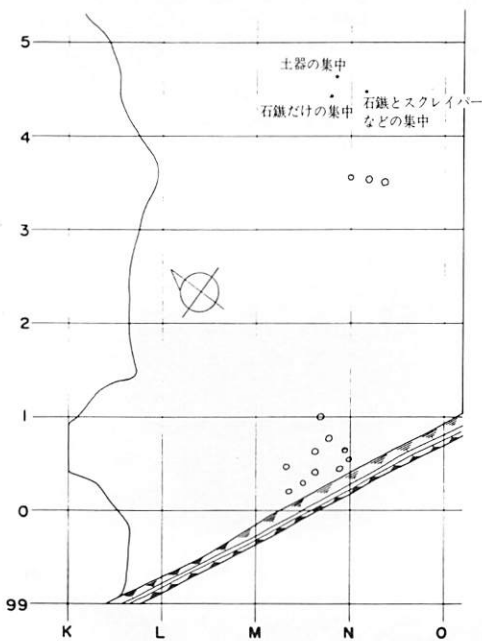


図 24 土器の集中出土状態

は、細長い袋状のものに入っていた状態を推定できる。すべて黒曜石を素材としている。

○ 大形スクレイパーの下から、石鏃・剥片・スクレイパーなど 20 点以上がまとめて出土した(図 29,30)。5 点を実測図で示し、のこりはパラフィンと石膏で固めてとりあげてある。大形スクレイパーと剥片 3 点を取りのぞくと、のこりは径 15 cm ほどの範囲におさまっている。

石鏃の集中地点の南側約 1~1.5 m のところに石鏃等 11 点が割合にまとめて出土した(図 26・p.31 の表)。この 11 点は、石鏃の集中地点のものと、素材、形態、つくり方など類似したところが多い。石鏃とスクレイパーなどの集中地点の西側約 2 m のところに、12 の石器が出土したが、これは、北筒式土器にともなう槍先であろう。



土器の集中状態

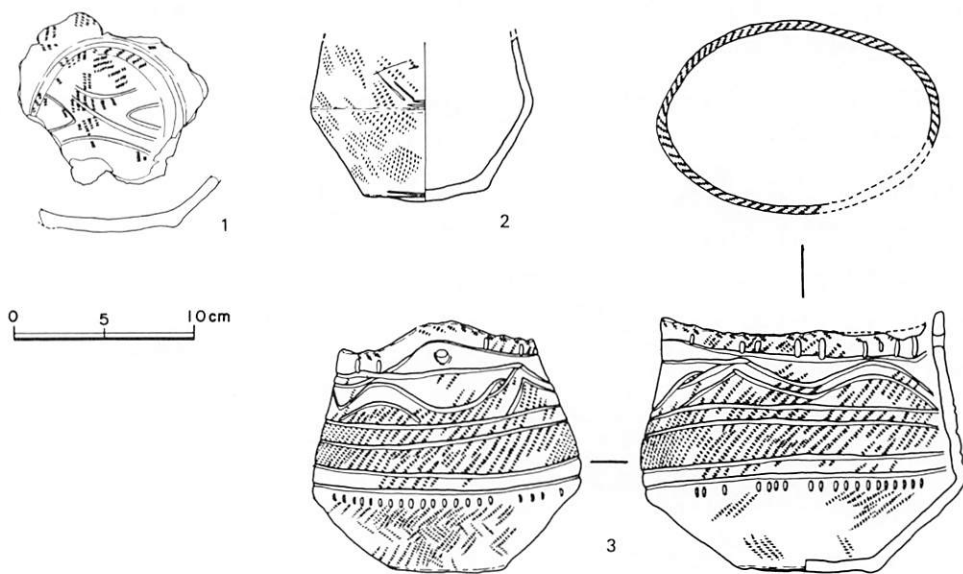


图 25 土 器



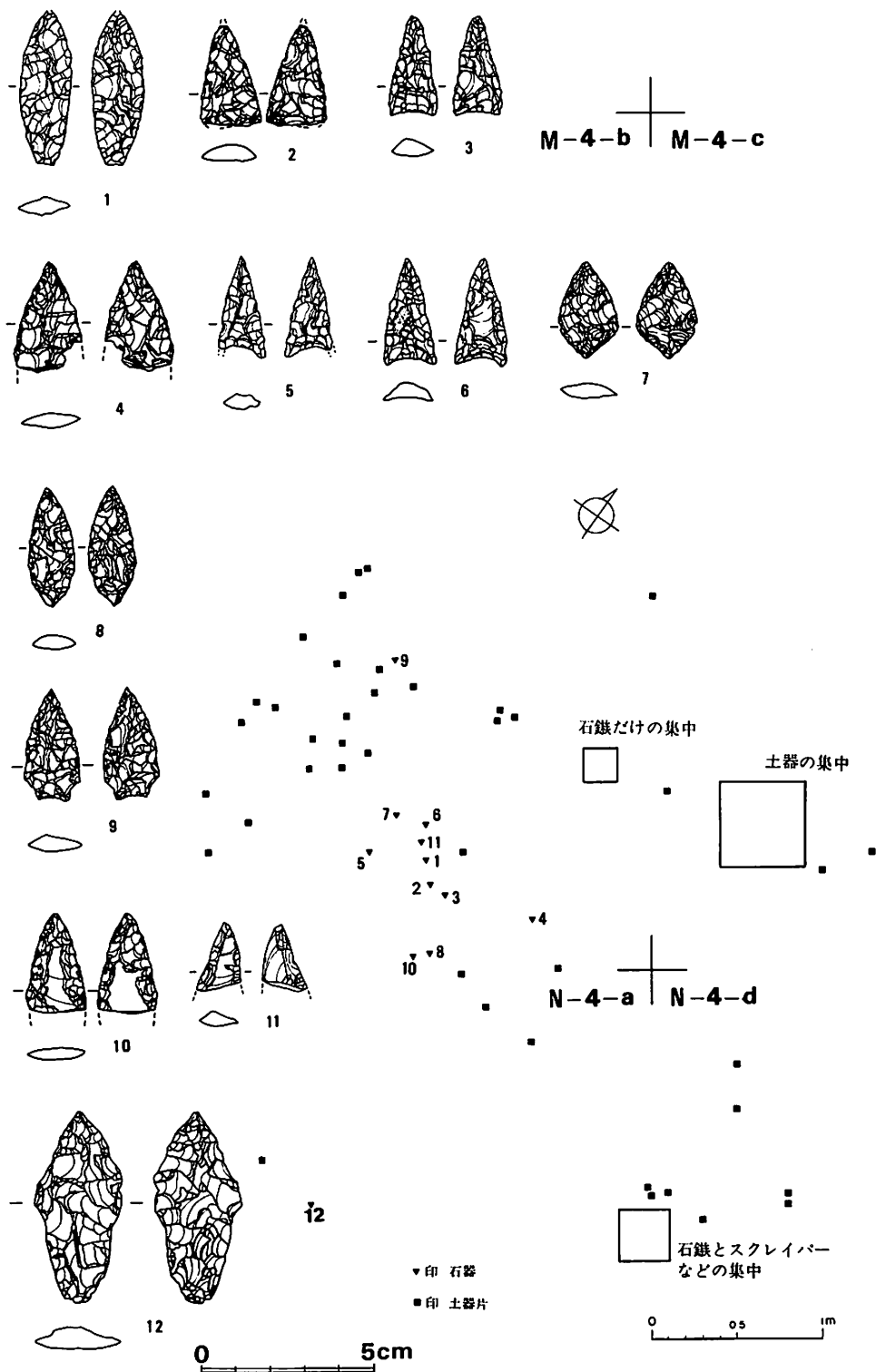
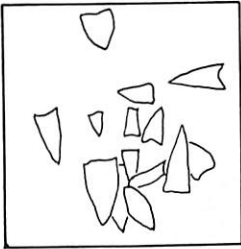


図 26 遺物の出土状態



番号	分類	重さ(g)	番号	分類	重さ(g)	番号	分類	重さ(g)
13	I A 3	0.7	22	I A 3	(1.6)	31	I A 3	5.9
14	"	(1.1)	23	"	(2.7)	32	"	(2.4)
15	"	(2.5)	24	"	3.0	33	"	8.0
16	"	2.4	25	"	1.3	34	"	4.9
17	"	(2.1)	26	"	(2.5)	35	I A 4	2.6
18	"	1.8	27	"	2.6	36	I A 5	(2.2)
19	"	2.4	28	"	1.6	37	"	(2.6)
20	"	2.7	29	"	4.0	38	I A	(0.3)
21	"	(2.1)	30	"	4.7			

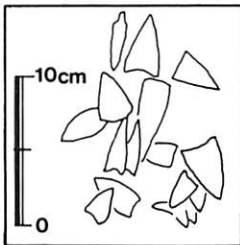


図 27 石鏃の出土状態



石鏃だけの集中 パラフィンと石膏で固めたところ

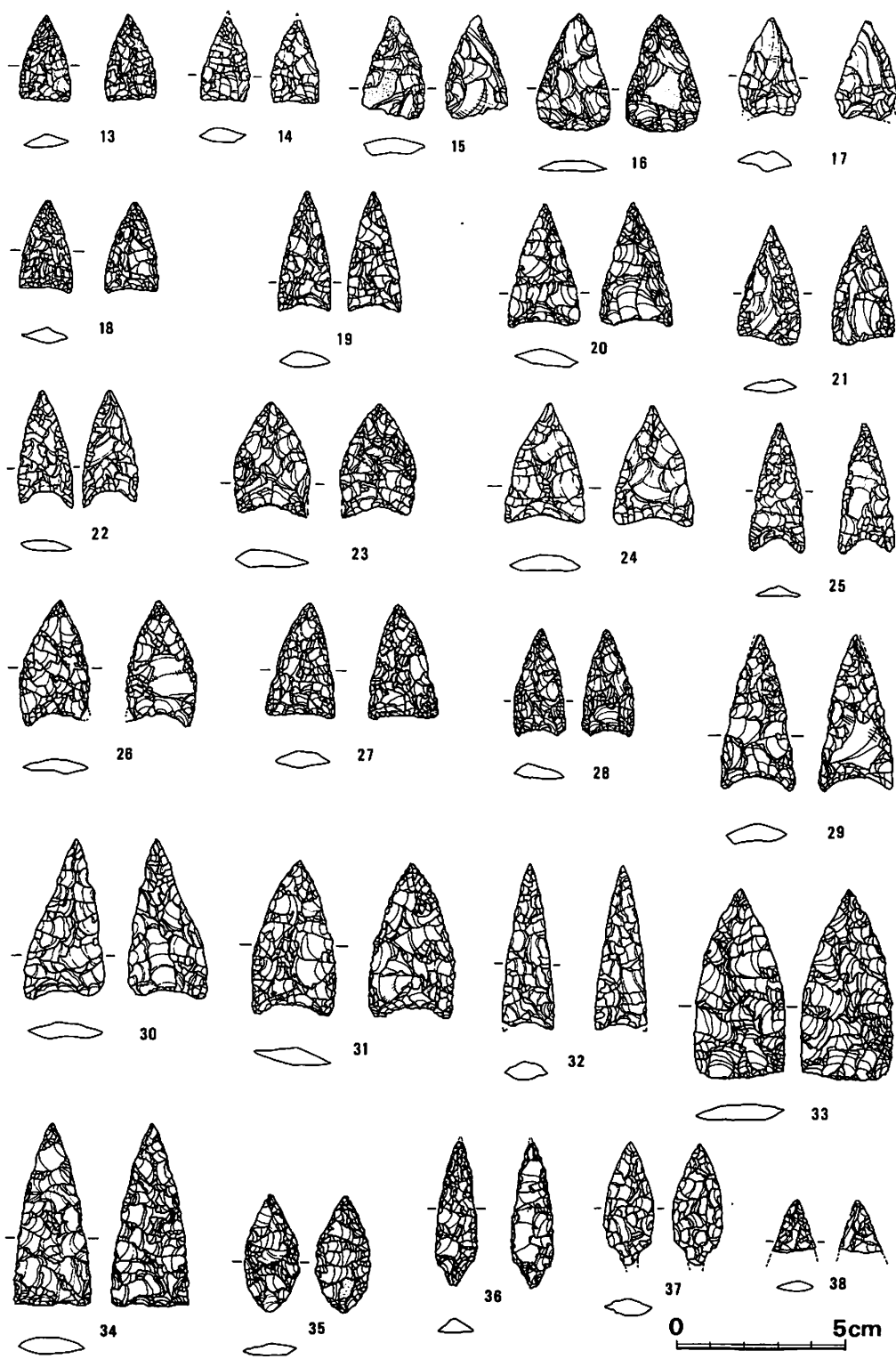


图 28 石 鏃

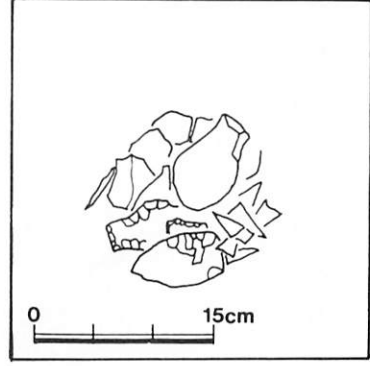
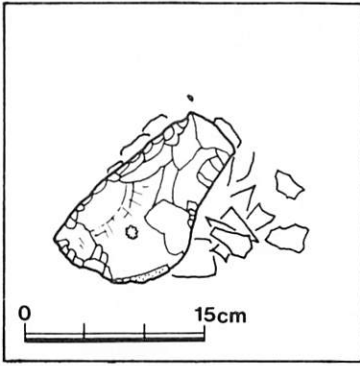
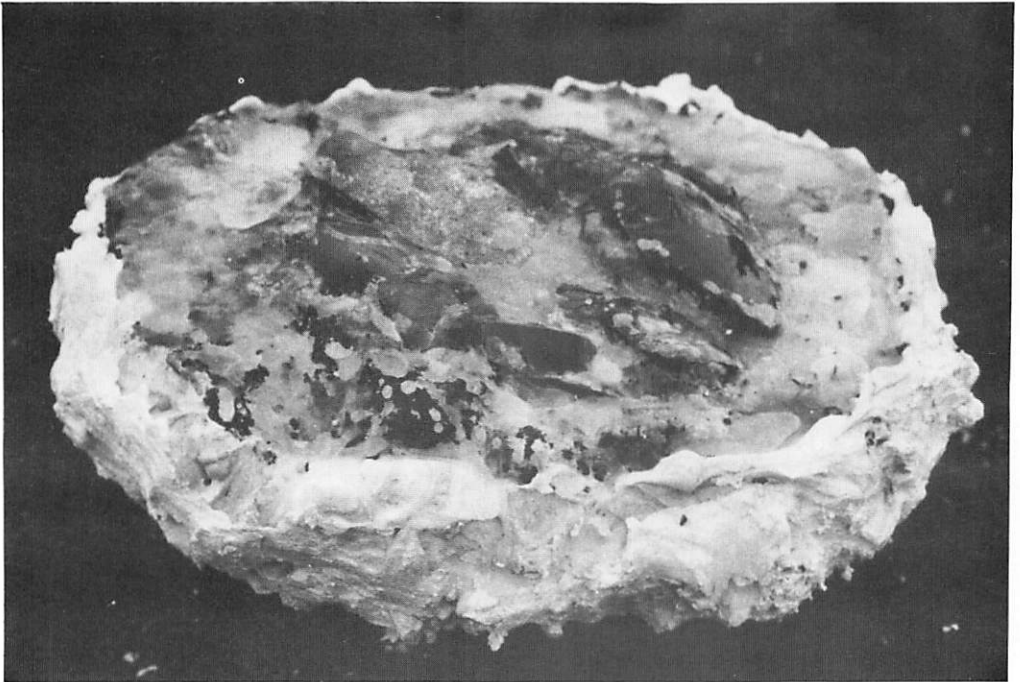
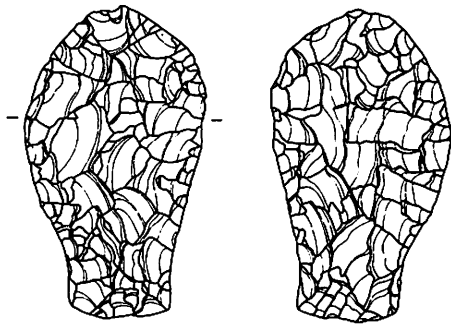


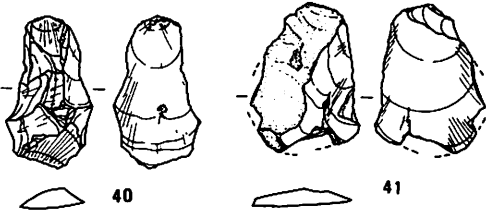
図 29 石鋏とスクレイパーなどの集中状態



石鋏とスクレイパーなどの集中 パラフィンと石膏で固めたもの

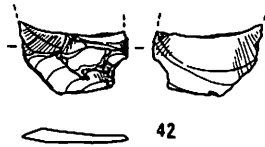


39



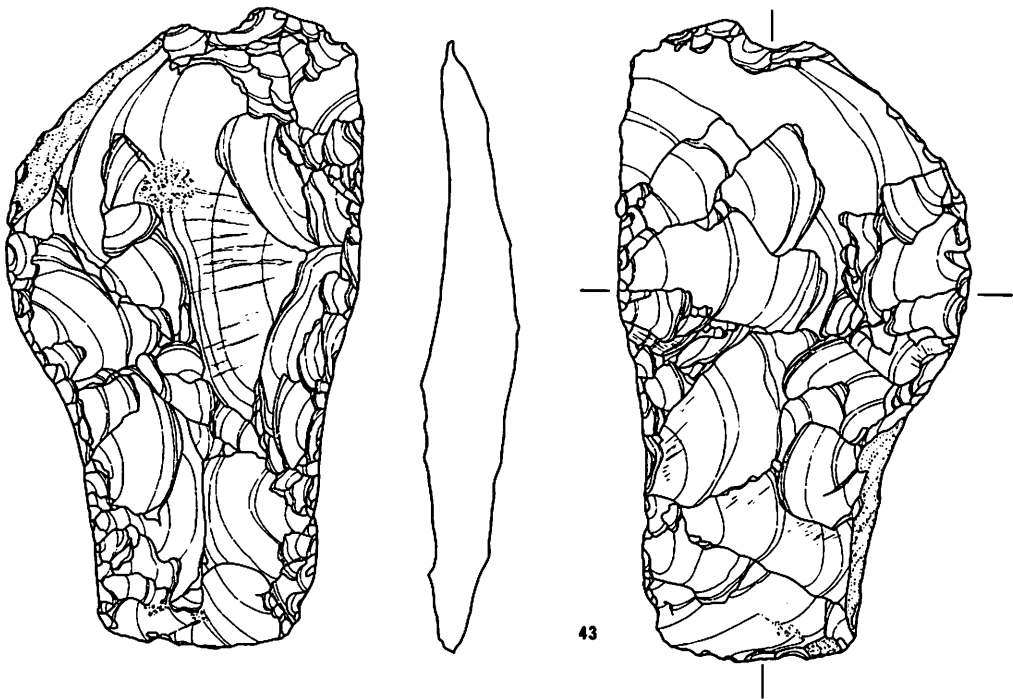
40

41



42

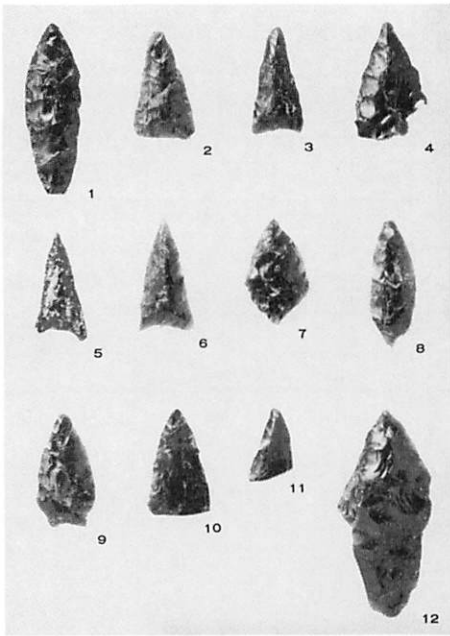
番号	分類	素材	重さ(g)	番号	分類	素材	重さ(g)
1	I A 2	黒曜石	3.6	10	I A	黒曜石	(1.7)
2	I A 3	"	(1.1)	11	I A	"	(0.3)
3	"	"	1.2	12	I B 1	"	7.2
4	"	"	(2.5)				
5	"	"	(1.0)	39	III B	珪岩	34
6	"	"	1.8	40	IX B	黒曜石	4.1
7	I A 4	"	2.3	41	IX B	"	(3.7)
8	"	"	2.2	42	IX B	"	(1.5)
9	I A 9	"	(2.7)	43	III B	"	290



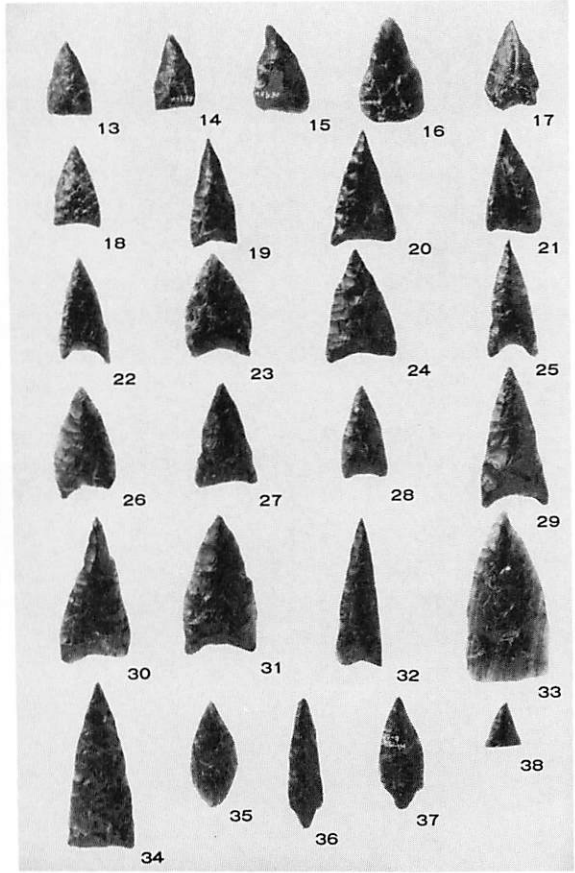
43

0 5cm

図 30 スクレイパーと剥片



まわりの出土石鏃等



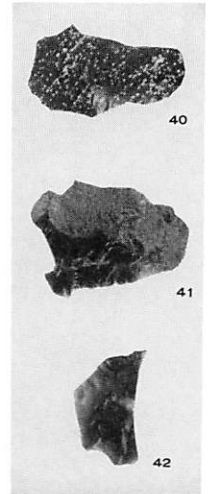
石鏃



スクレイパー



スクレイパー



剥片

4 石器等 (図 31~38)

図示した石器等の出土位置は、表と分布図(図 31)で示した。地形的には、標高 45 m よりも低いところ、傾斜のゆるやかなところに多くみられる。

石器等の分類にあたっては、当埋蔵文化財センターで使用している分類規準によった。石器等の大別は、定形的な石器を I~VIII 群に分け、IX 群：石核・剥片類、X 群：加工痕や使用痕のある剥片・礫である。定形的な石器は、I 群：やじり・やり先類、II 群：石錐類、III 群：ナイフ・スクレイパー類、IV 群：石斧類、V 群：たたき石・台石類、VI 群：すり石・石皿類、VII 群：石鋸・砥石類、VIII 群：石錘類に分ける。定形的な石器の細別にあたっては、素材、形態、つくり方、伴出土器、石器の組みあわせ等をもとに、時代の先後を考慮して分類している。

定形的な石器は、破片などもふくめて、そのほとんどを図示した。個々の石器について、土器との共伴関係はとらえきれず石器群としては示しえないので、器種ごとに説明していく(図 32~38)。

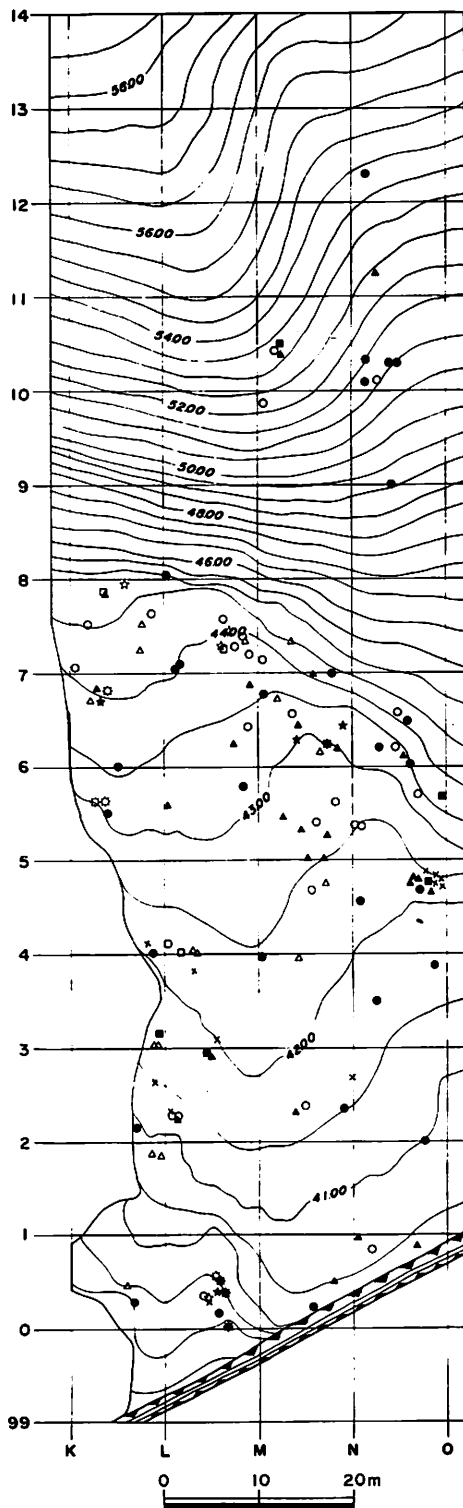
1~29 は石鋸である。1 は早期の土器にともなうものであろう。30~56 は、両面加工の槍先またはナイフである。31, 32, 36, 37, 40 などのように刃部の不ぞろいのあるものがある。使用によるすりへり、刃部再生の繰返えしなどによるものであろう。57~61 は石錐である。62~64 は、つまみの付いたナイフである。65~90 は、スクレイパーである。二次的な剝離によって刃部をつくりだしているものを示した。細分はおこなっていない。

91~108 は石斧類である。105~108 の細長くて刃部の幅が 2 cm 前後のものは、石のみである。109~112 は、たたき石である。113~116 は、すり石である。113 は、早期の土器にともなうものであろう。115, 116 は晩期の土器にともなう可能性がある。117~120 は、砥石である。121~132 は、加工痕や使用痕のある剥片である。131, 132 はピエス・エス・キーユと呼ばれるものである。

図 示 し た 石 器 等

図 番号	名 称	分類	出 土 区 注 記 番 号	計測値 (g)	材 質	写 真 番 号	図 番号	名 称	分類	出 土 区 注 記 番 号	計測値 (g)	材 質	写 真 番 号
1	石 や じ り	IA2a	N-3-d-2	(0.1)	黒曜石	1	18	石 や じ り	IA5	N-6-b-1	(1.8)	黒曜石	18
2	"	IA3	M-2-b-1	(0.1)	"	2	19	"	"	M-3-d-2	(2.6)	"	19
3	"	"	L-7-a-7	(0.1)	"	3	20	"	IA	N-4-c-14	(1.7)	"	20
4	"	"	N-2-b-5	(1.5)	"	4	21	"	"	L-0-b-25	(1.1)	"	21
5	"	"	N-4-d-12	1.3	"	5	22	"	"	N-6-b-19	(0.9)	"	22
6	"	"	M-0-b-2	1.0	"	6	23	"	"	N-12-a-4	(1.7)	"	23
7	"	"	N-3-c-1	2.1	"	7	24	"	"	N-9-a-1	(0.1)	"	24
8	"	IA4	K-6-b-5	(1.6)	"	8	25	"	"	N-10-a-30	(0.8)	"	25
9	"	"	K-0-b-1	1.7	"	9	26	"	"	K-4-b-31	(0.6)	"	26
10	"	"	L-8-a-7	3.1	"	10	27	"	"	N-10-a-30	(0.2)	"	27
11	"	"	N-6-a-61	0.7	"	11	28	"	"	N-10-a-24	(0.9)	"	28
12	"	IA5	K-2-b-9	(1.4)	"	12	29	"	"	N-10-a-6	(0.5)	"	29
13	"	"	K-5-d-5	(0.7)	"	13	30	や り 先 又 は ナ イ フ	IB1	L-7-b-13	3.7	"	30
14	"	"	L-7-a-18	2.1	"	14	31	"	"	N-6-a-31	6.3	"	31
15	"	"	L-5-c-22	1.2	"	15	32	"	"	L-4-a-3	(9.2)	"	32
16	"	"	M-6-d-1	0.7	"	16	33	"	"	M-6-d-43	(7.1)	"	33
17	"	"	M-6-c-20	(2.0)	"	17	34	"	"	K-7-c-48	(6.5)	"	34

図 番号	名 称	分類	出 土 区 注 記 番 号	計測値 (g)	材 質	写真 番号	図 番号	名 称	分類	出 土 区 注 記 番 号	計測値 (g)	材 質	写真 番号
35	やり先又はナイフ	IB1	L-7-b-1	(15.2)	黒曜石	35	84	スクレイパー	III B	M-10-a-4	(1.1)	黒曜石	84
36	"	"	L-0-a-25	8.2	"	36	85	"	"	N-4-c-16	(1.7)	"	85
37	"	"	M-4-c-21	6.7	"	37	86	"	"	M-5-b-1	(11.1)	"	86
38	"	"	L-7-b-81	(4.2)	"	38	87	"	"	L-6-b-10	(3.8)	頁 岩	87
39	"	"	M-7-a-5	5.7	"	39	88	"	"	M-6-c-24	(16.3)	ノコギリ石	88
40	"	"	M-2-a-1	12.6	"	40	89	"	"	M-5-a-2	(5.0)	黒曜石	89
41	"	IB	N-5-c-21	(7.4)	"	41	90	"	"	L-5-d-2	(2.0)	"	90
42	"	"	N-10-a-27	(1.8)	"	42	91	石 斧	IV A	M-6-d-17	85.8	片 岩	91
43	"	"	L-2-a-6	(10.0)	"	43	92	"	"	K-3-b-7	122.9	泥 岩	92
44	"	"	N-5-a-2	(8.3)	"	44	93	"	"	K-6-d-9	285.0	片 石	93
45	"	"	M-5-c-3	(12.0)	"	45	94	"	"	K-7-b-5	33.1	泥 岩	94
46	"	"	M-5-b-6	(2.3)	"	46	95	"	"	K-1-c-6	55.1	片 岩	95
47	"	"	N-6-d-10	(2.0)	"	47	96	"	"	K-3-b-7	105.1	泥 岩	96
48	"	"	L-7-c-14	(8.7)	"	48	97	"	"	K-0-c-1	(12.2)	"	97
49	"	"	K-7-a-6	(5.1)	"	49	98	"	"	L-7-b-80	82.3	緑色泥岩	98
50	"	"	N-0-d-1	(1.8)	"	50	99	"	"	L-4-a-19 L-4-a-22	(250.0)	片 岩	99
51	"	"	K-7-d-10	2.7	"	51	100	"	"	M-4-b-7	(41.0)	泥 岩	100
52	"	"	L-6-b-16	4.6	"	52	101	"	"	M-6-b-10	(64.9)	緑色泥岩	101
53	"	"	M-10-a-11	(1.6)	"	53	102	"	"	M-3-d-3	(47.7)	泥 岩	102
54	"	"	L-2-a-5	(5.9)	"	54	103	"	"	K-7-c-1	22.2	片 岩	103
55	"	"	M-9-d-1	(2.3)	"	55	104	"	"	K-1-c-3	26.5	泥 岩	104
56	"	"	N-5-a-1	(7.1)	"	56	105	石 の み	IV B	M-6-a-18	19.9	泥 岩	105
57	石 錐	II A2	L-2-d-1	4.5	"	57	106	"	"	L-0-b-4	13.4	片 岩	106
58	"	"	M-10-a-2	(4.1)	"	58	107	"	"	K-6-d-8	(19.1)	泥 岩	107
59	"	II A3	N-5-c-5	7.1	"	59	108	"	"	M-6-b-51	(16.9)	泥 岩	108
60	"	"	N-4-c-11	5.5	"	60	109	たたき石	V A	L-0-a-26	200.0	安山岩	109
61	"	"	K-3-b-11	(11.8)	"	61	110	"	"	K-7-c-40	(305.0)	砂 岩	110
62	つまみ付きナイフ	III A	K-7-d-12	22.6	"	62	111	"	"	L-7-b-28	(220.0)	"	111
63	"	"	L-7-b-38	10.4	"	63	112	"	"	L-7-b-6	109.8	砂 岩	112
64	"	"	L-4-a-5	(4.2)	硬質頁岩	64	113	す り 石	VI A1	M-6-b-44	710.0	安山岩	113
65	スクレイパー	III B	M-6-a-20	4.0	黒曜石	65	114	"	VI A2	L-0-b-7	330.0	砂 岩	114
66	"	"	N-11-a-29	4.4	"	66	115	"	"	L-0-c-9	435.0	砂 岩	115
67	"	"	M-5-b-8	8.3	"	67	116	"	"	L-0-b-5	575.0	安山岩	116
68	"	"	M-5-b-2	8.8	"	68	117	砥 石	VII B	L-0-c-8	870.0	砂 岩	117
69	"	"	M-2-a-5	(3.9)	"	69	118	"	"	K-6-d-6	215.0	"	120
70	"	"	N-6-b-18	28.7	"	70	119	"	"	K-5-d-1	(250.0)	"	117
71	"	"	M-0-c-6	2.3	"	71	120	"	"	K-5-d-9	(360.0)	"	119
72	"	"	N-4-c-15	(1.7)	"	72	121	加工痕、使用 痕のある刺片	X A	K-4-b-6	6.8	黒曜石	121
73	"	"	M-5-a-1	2.1	"	73	122	"	"	L-3-b-7	2.0	"	122
74	"	"	M-6-b-33	(2.6)	"	74	123	"	"	M-2-c-1	2.6	"	123
75	"	"	L-2-a-11	12.1	"	75	124	"	"	N-4-c-10	(2.3)	"	124
76	"	"	K-6-d-2	(5.1)	"	76	125	"	"	N-4-c-3	4.8	"	125
77	"	"	N-4-c-13	(3.7)	"	77	126	"	"	L-3-d-23	2.1	"	126
78	"	"	L-2-d-2	52.1	"	78	127	"	"	N-4-c-10	(0.8)	"	127
79	"	"	L-6-c-13	(6.9)	"	79	128	"	"	K-2-c-9	1.3	"	128
80	"	"	K-7-d-14	(4.8)	"	80	129	"	"	N-4-c-10	(0.1)	"	129
81	"	"	N-0-c-2	(6.9)	"	81	130	"	"	N-4-c-10	(0.4)	"	130
82	"	"	N-0-d-4	(5.0)	"	82	131	"	"	L-0-a-11	8.0	"	131
83	"	"	N-4-c-12	(5.8)	"	83	132	"	"	L-2-a-11	4.3	"	132



- I A やじり
- I B やり先又はナイフ
- II A 石錐
- III A つまみ付きナイフ
- ▲ III B スクレイパー
- △ IV A 石斧
- * IV B 石のみ
- ☆ V A たたき石
- VI A すり石
- VII B 砥石
- * X A 加工痕、使用痕のある剥片

● 等高線は遺物包含層最下面を示すものであり、遺物検出面ではない。

図 31 図示した石器等の出土位置

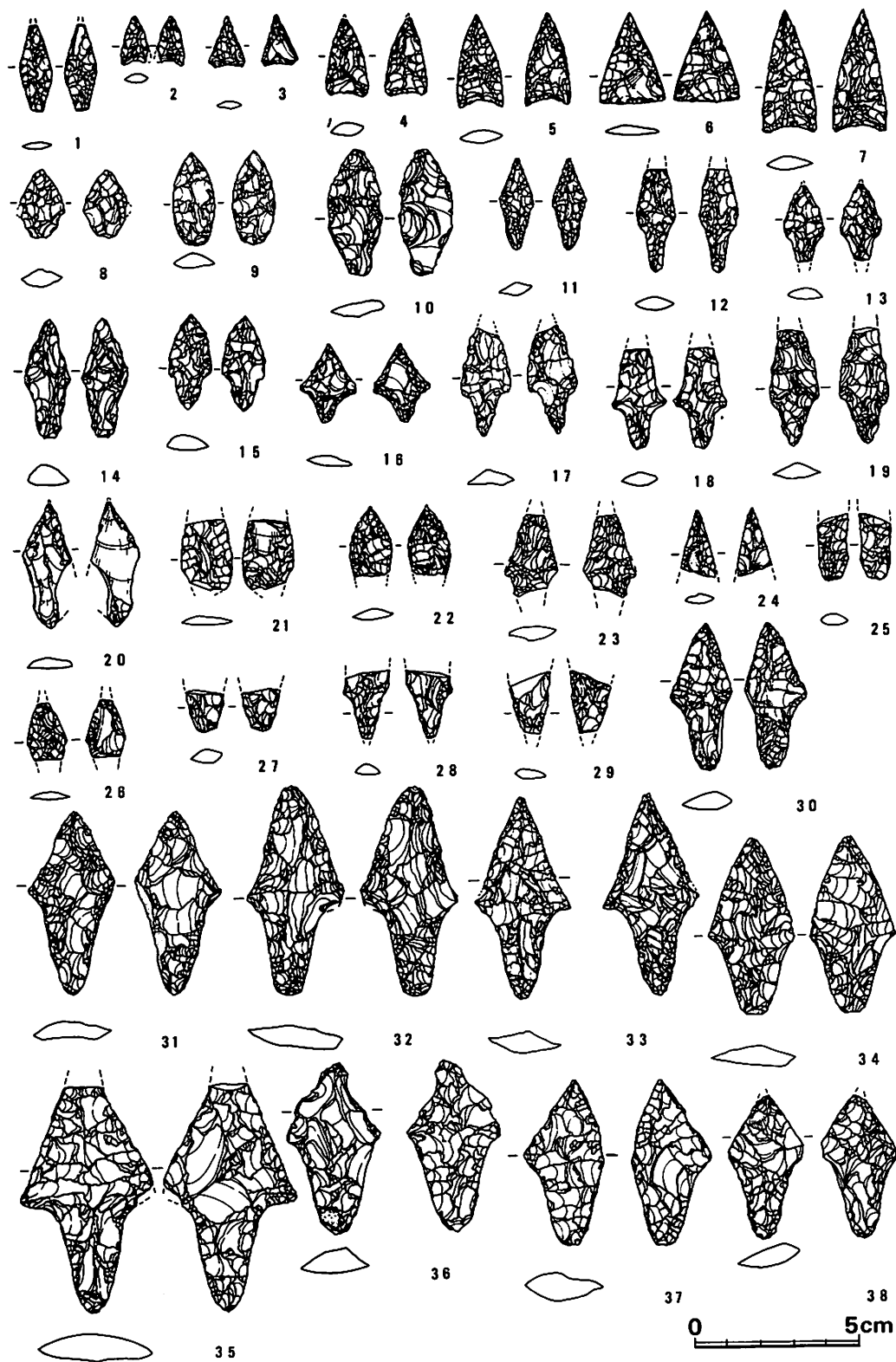


图 32 石器

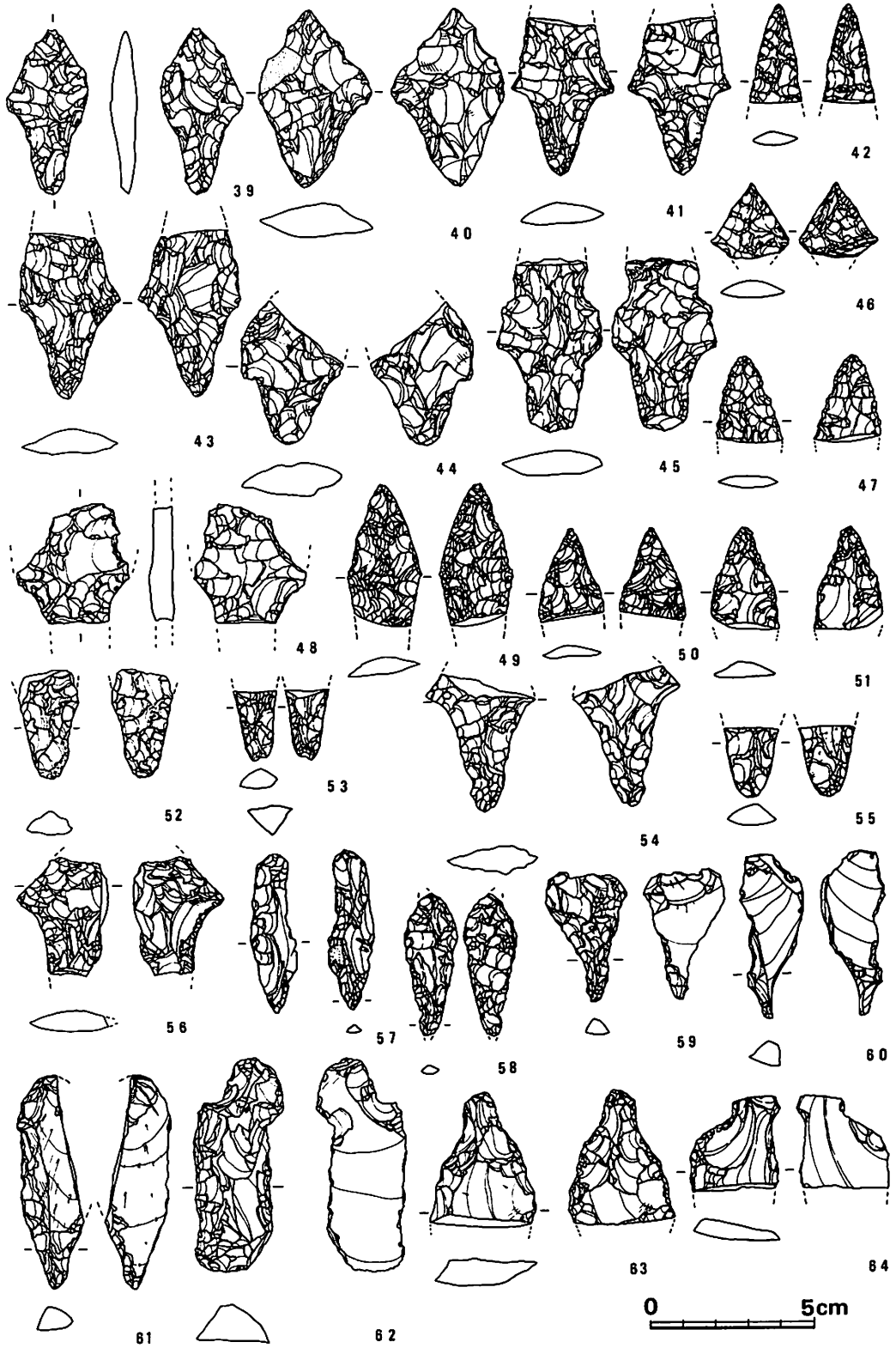


图 33 石器

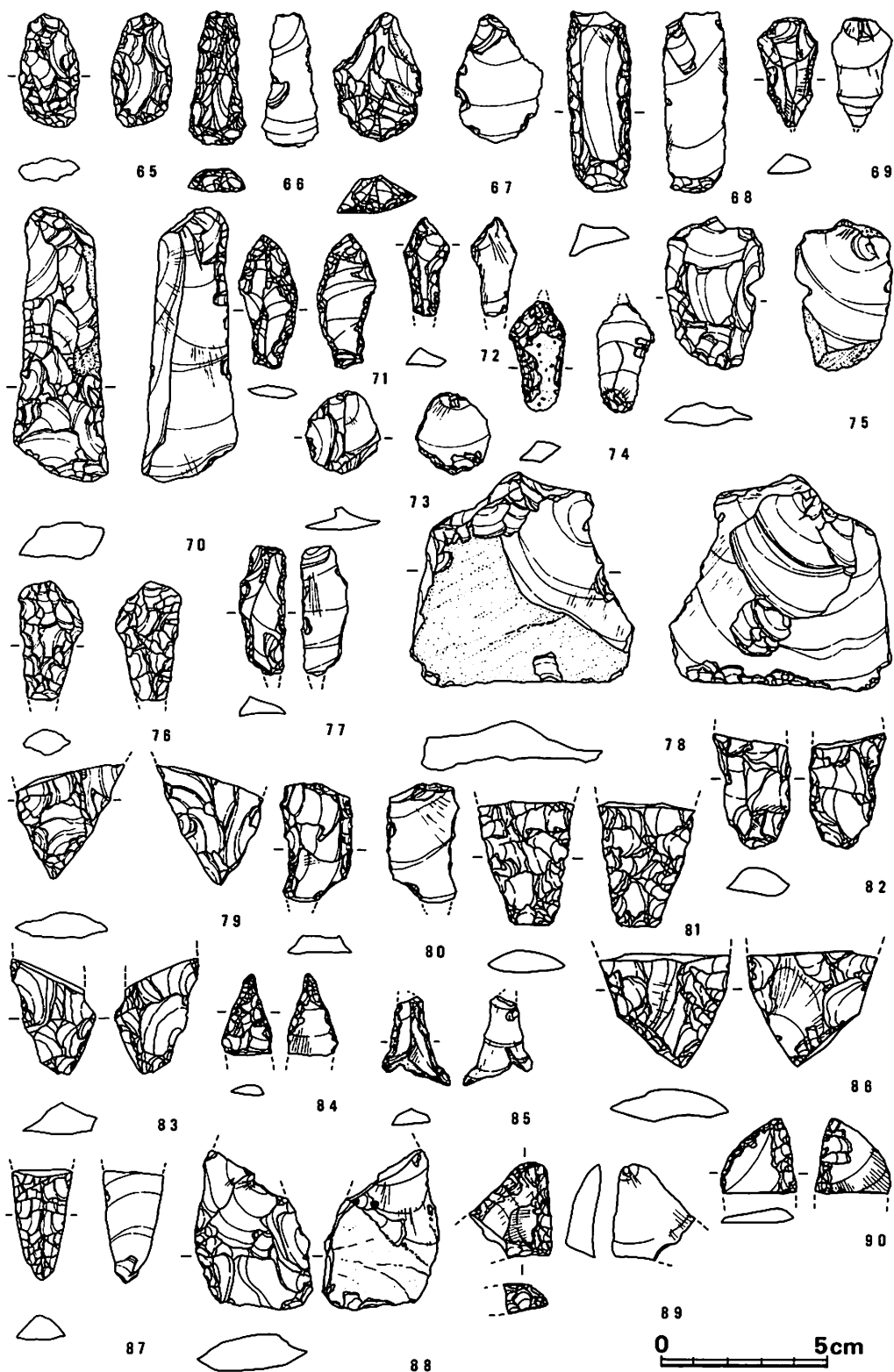


图 34 石器

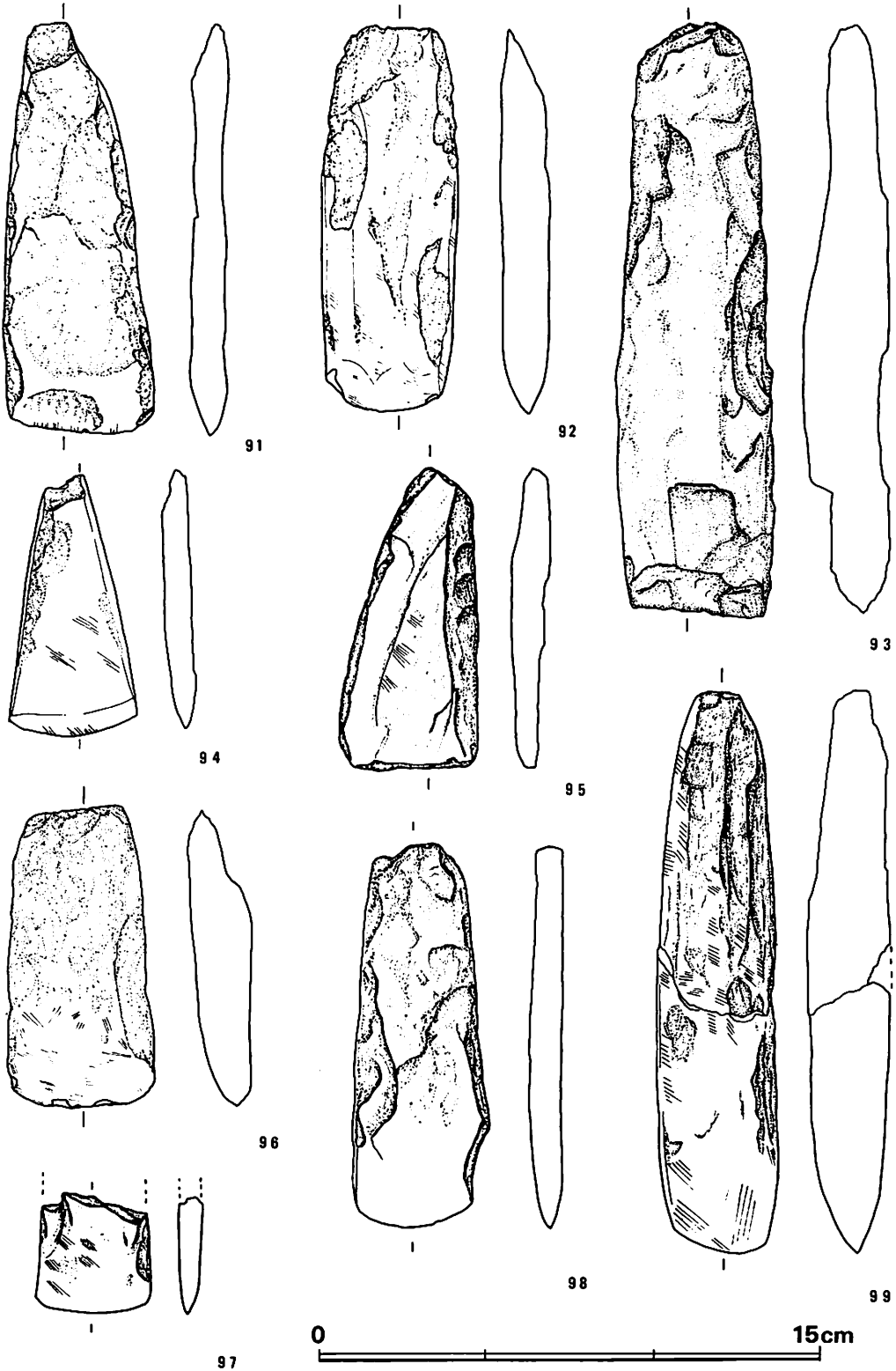


图 35 石器

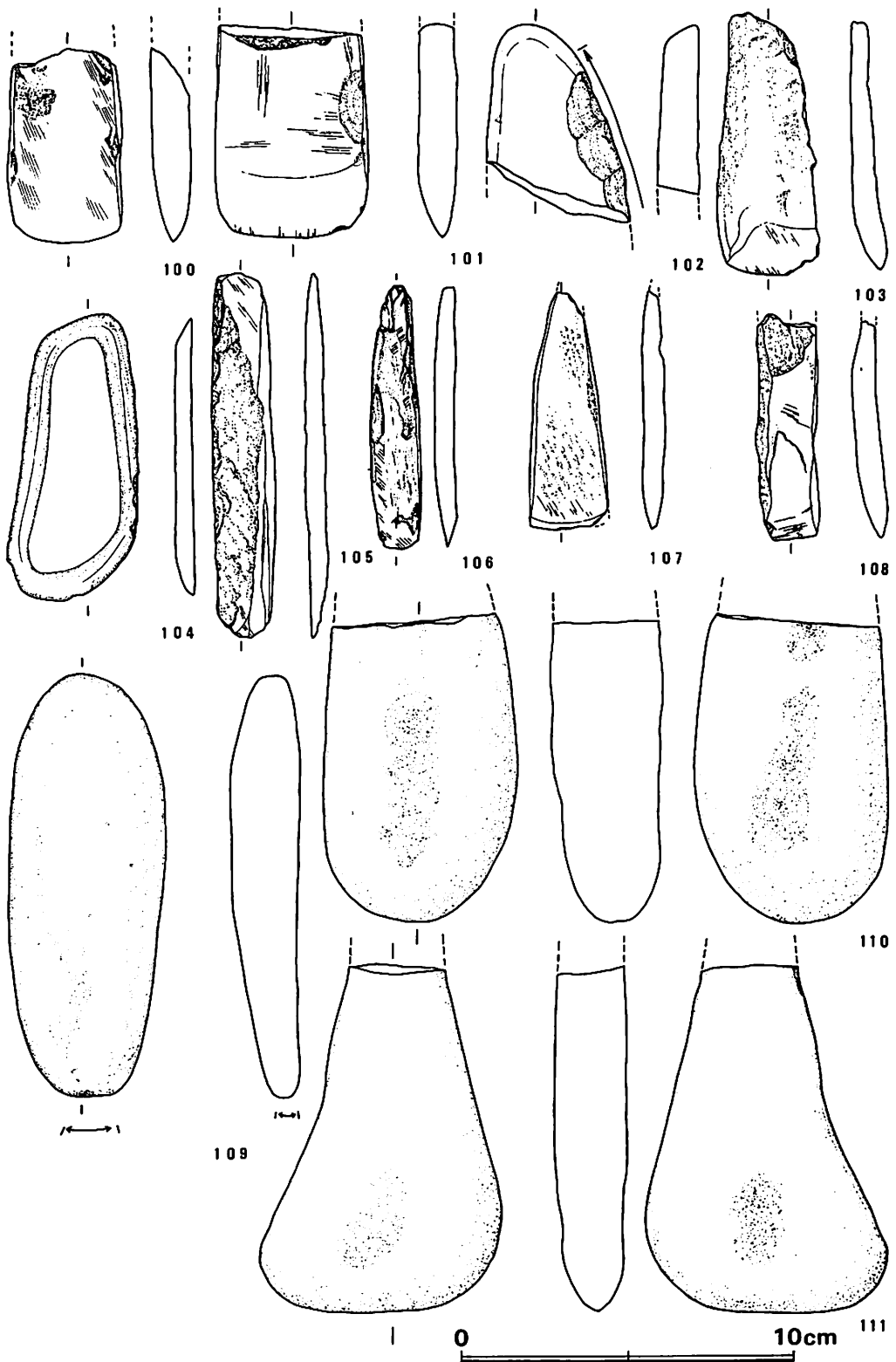


图 36 石 器

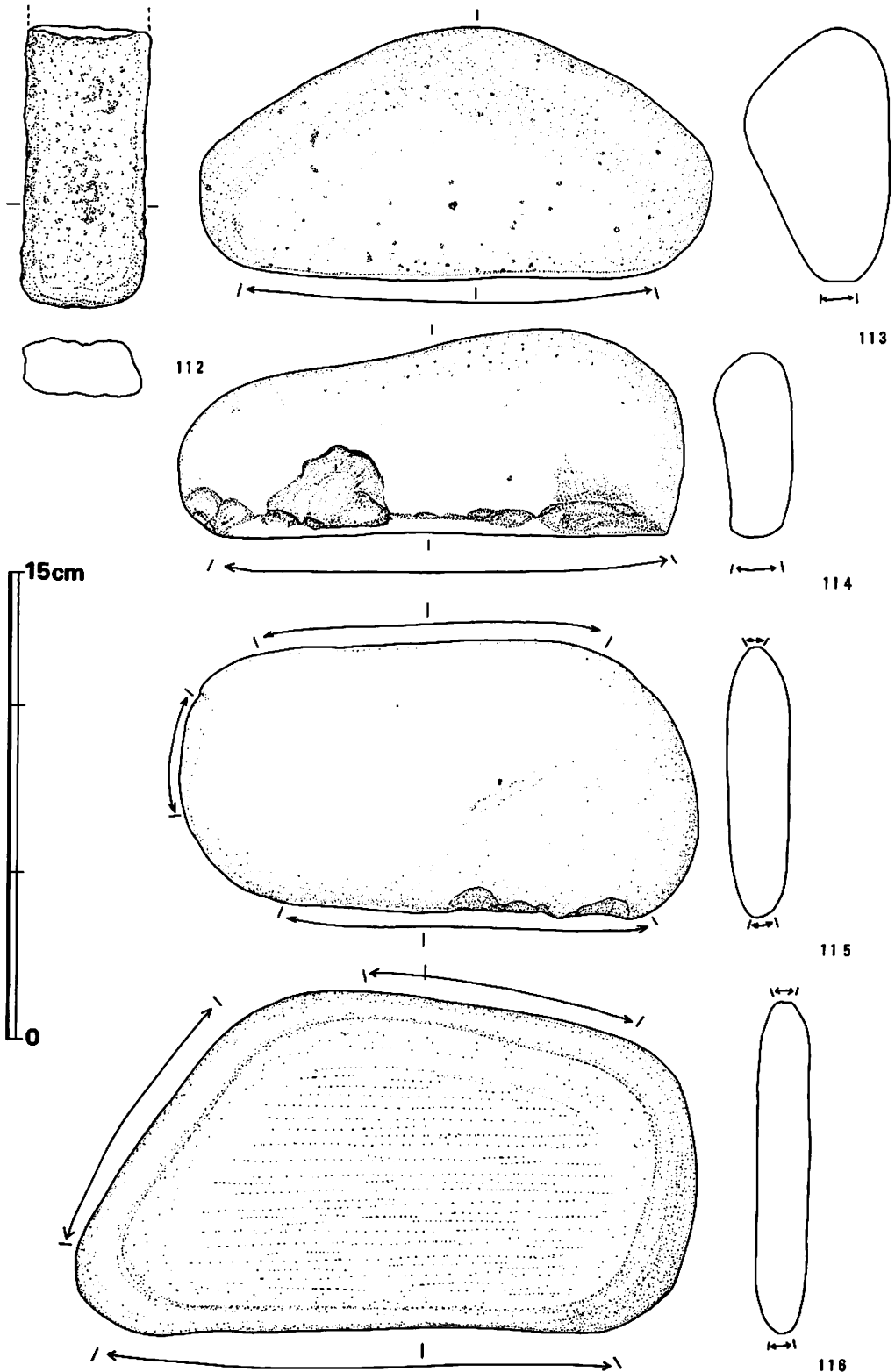


图37 石器

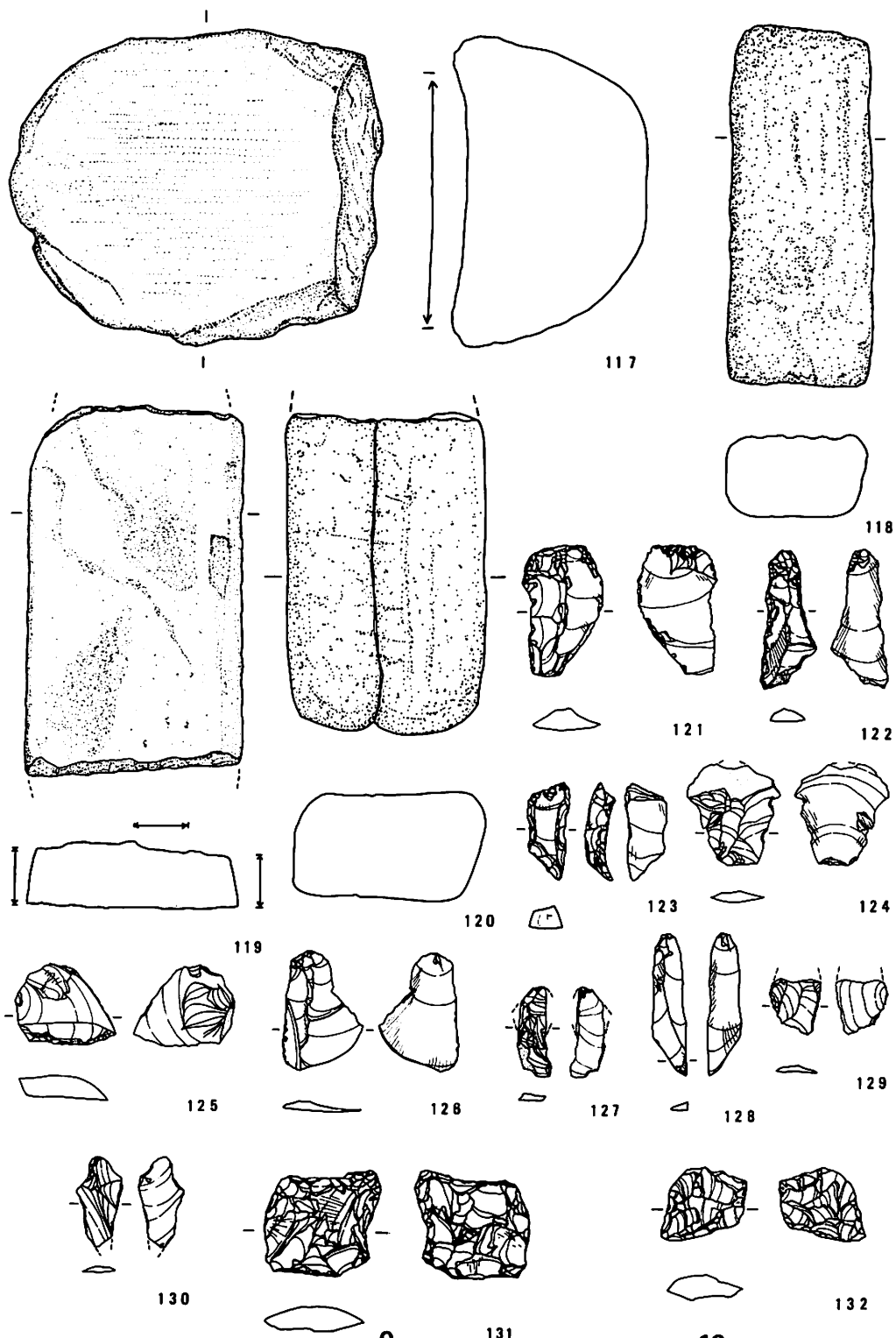
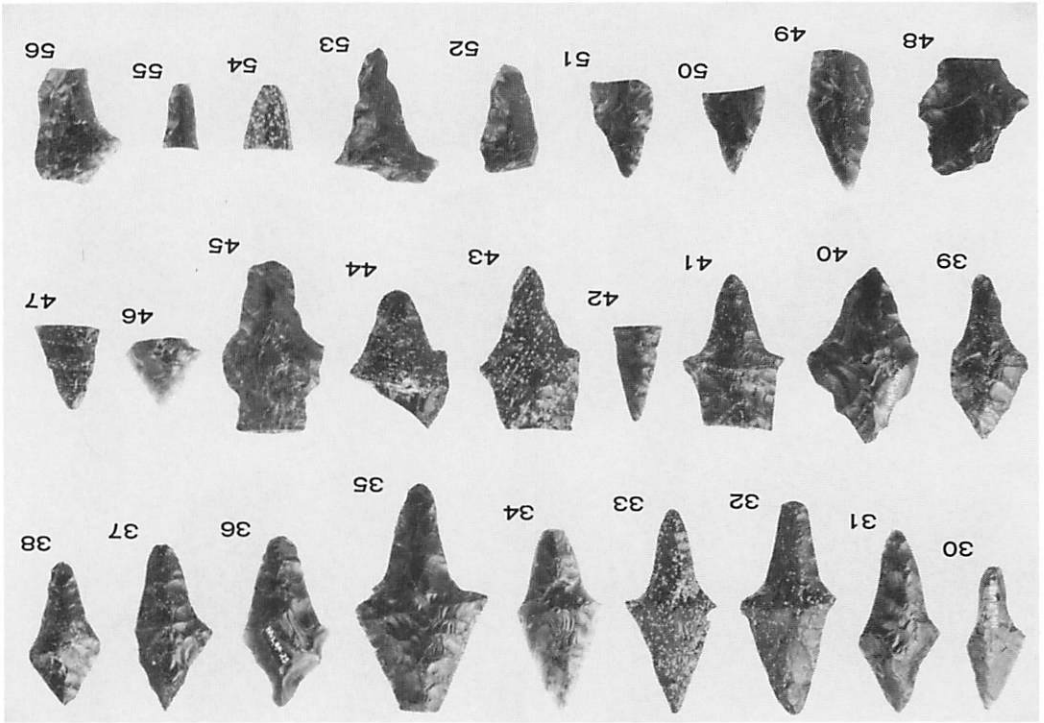
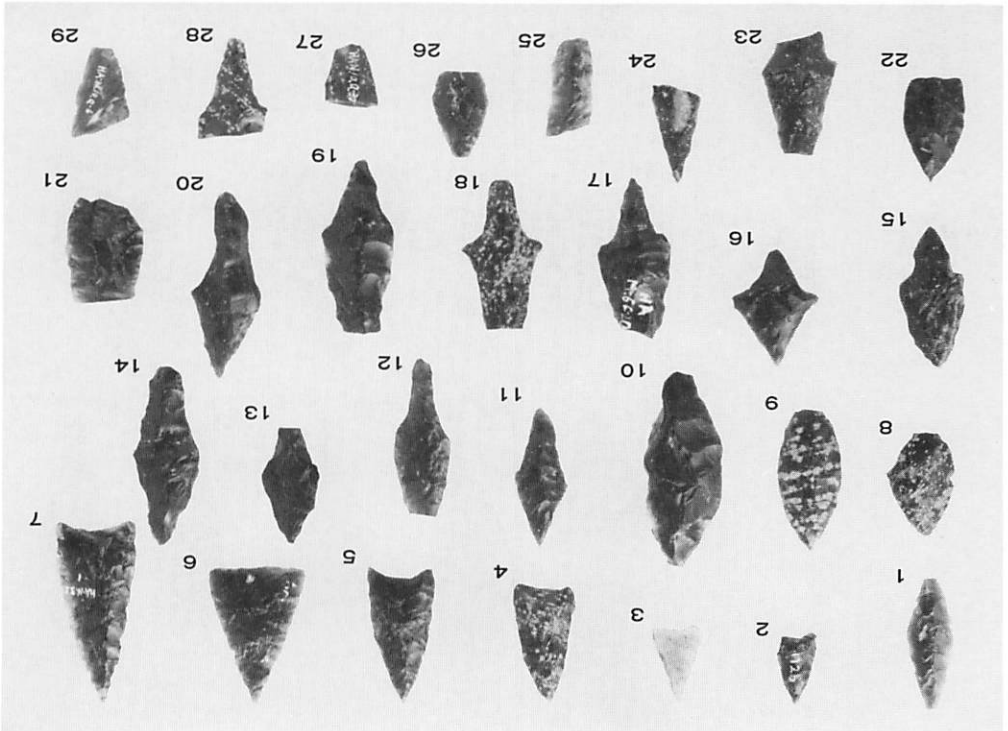


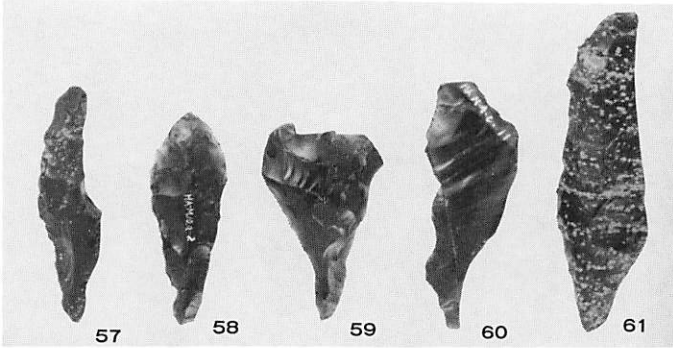
图 38 石器

やり先

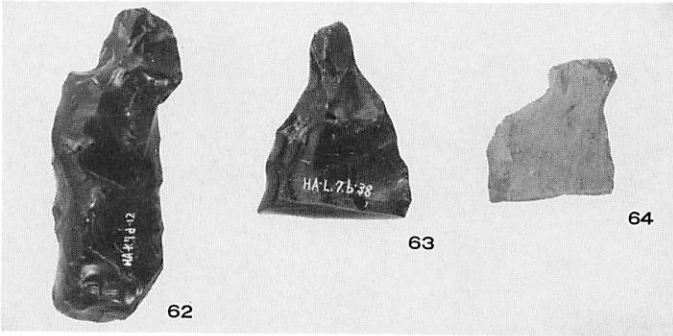


やり

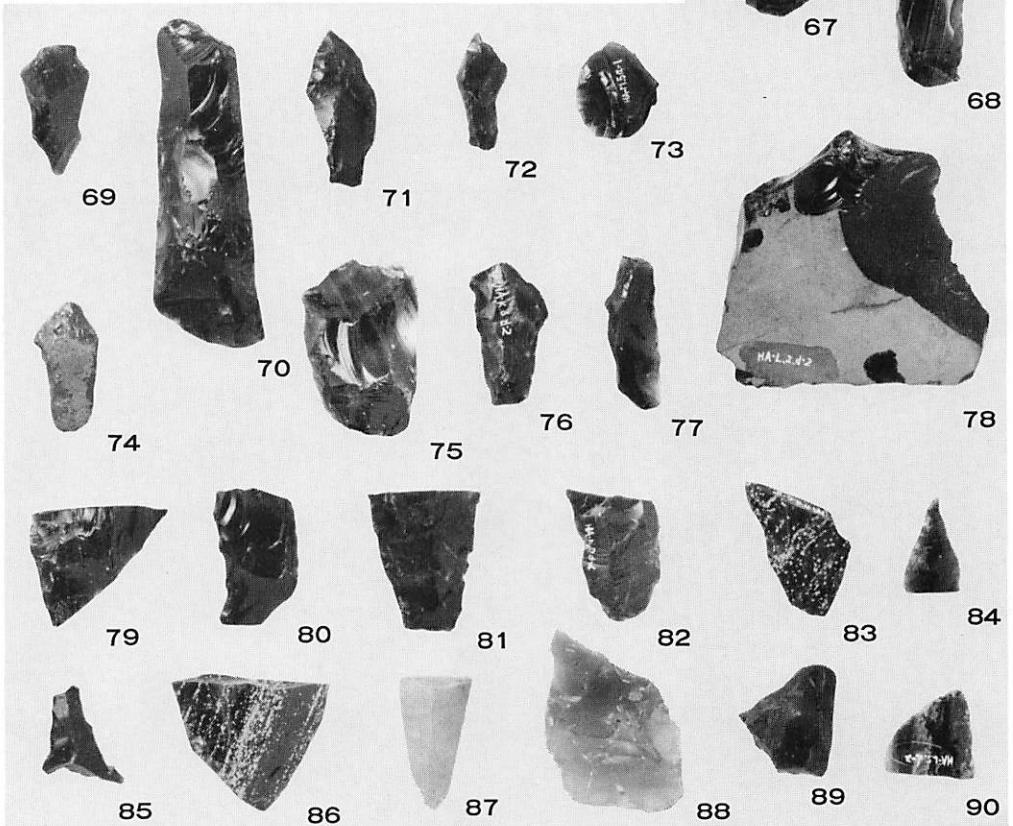
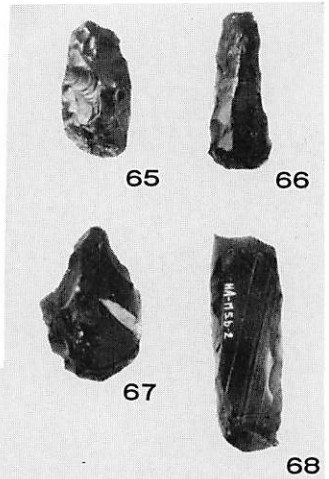




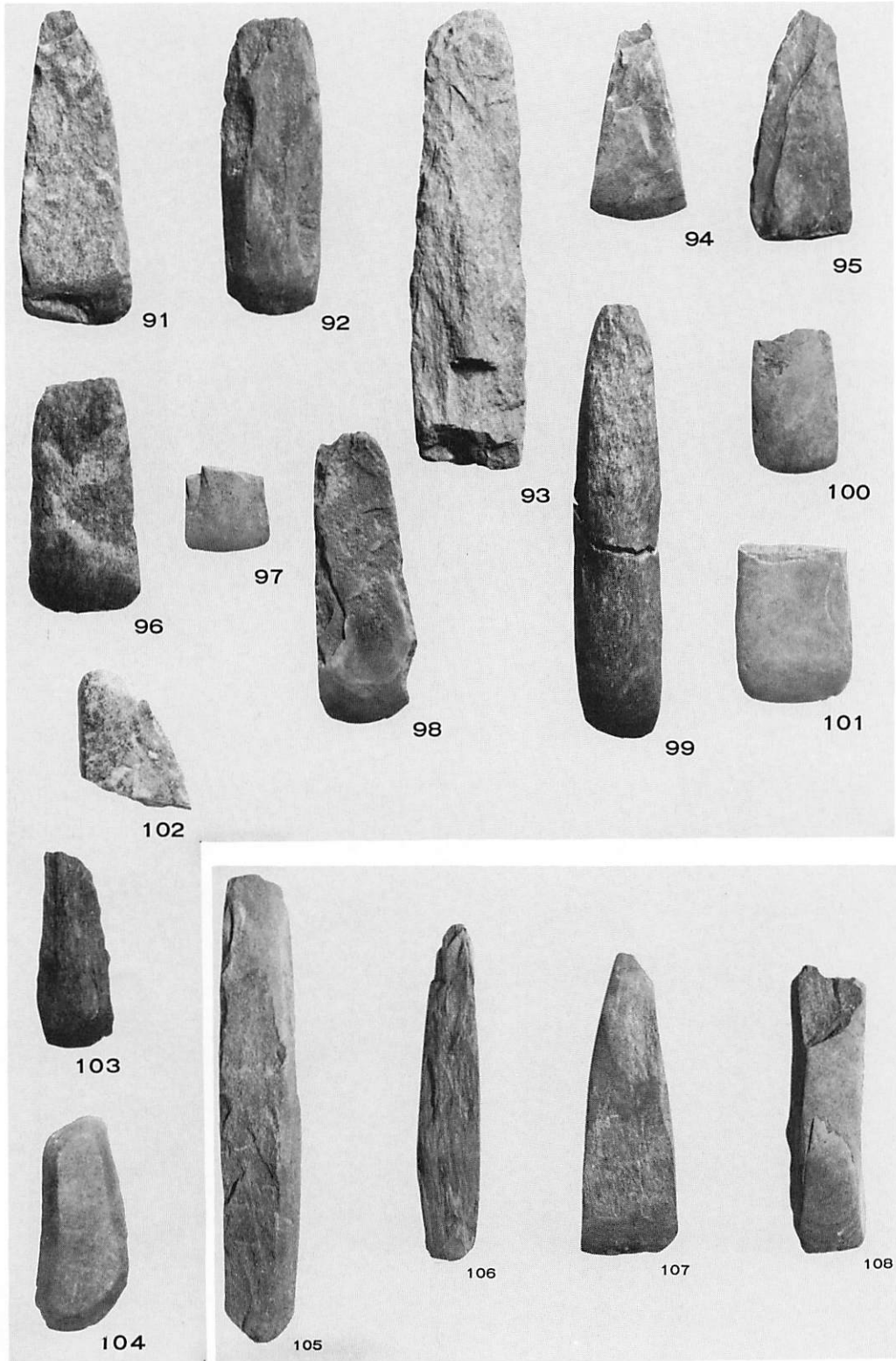
石 錐



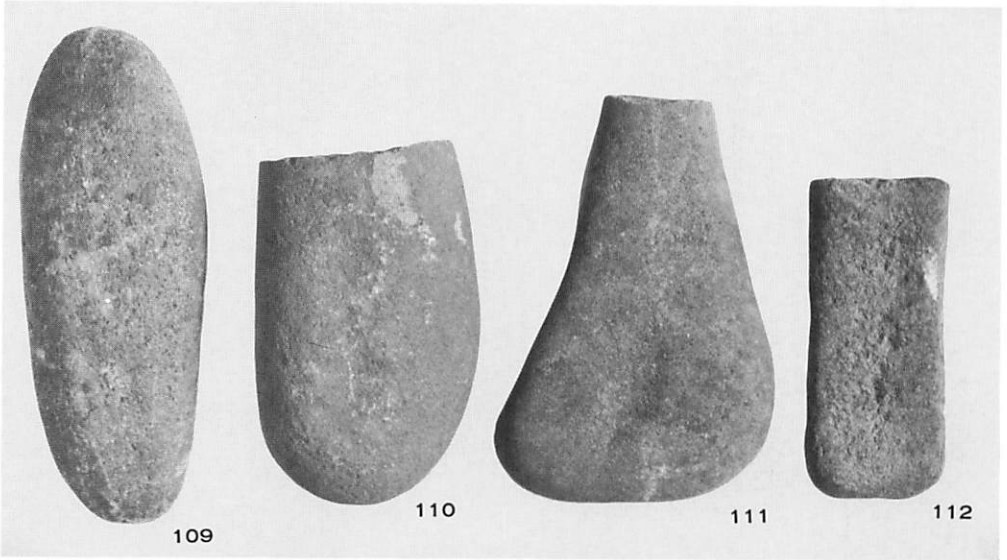
つまみ付きナイフ



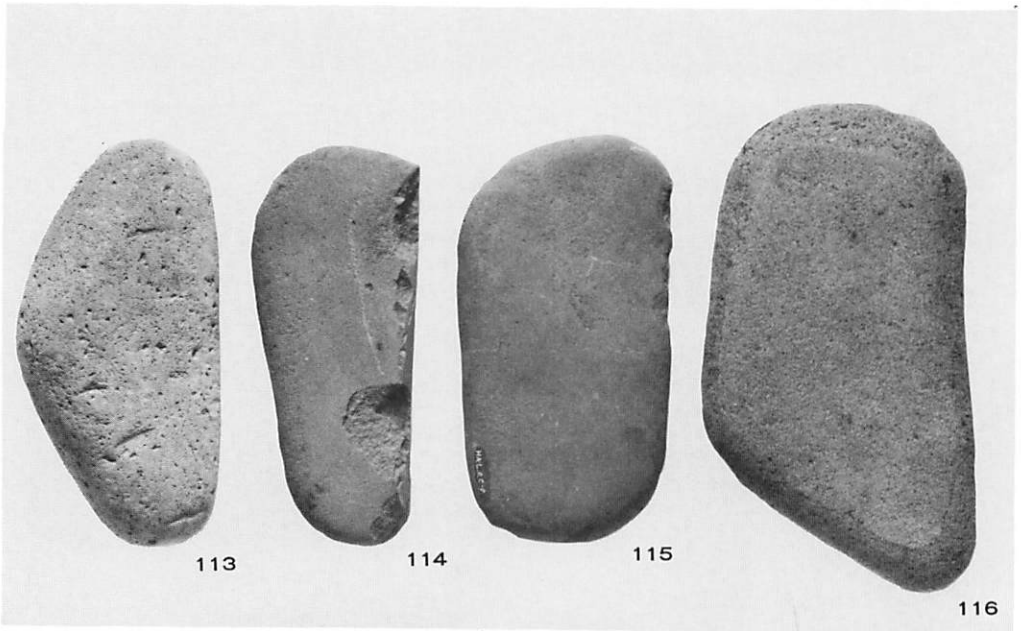
スクレイパー



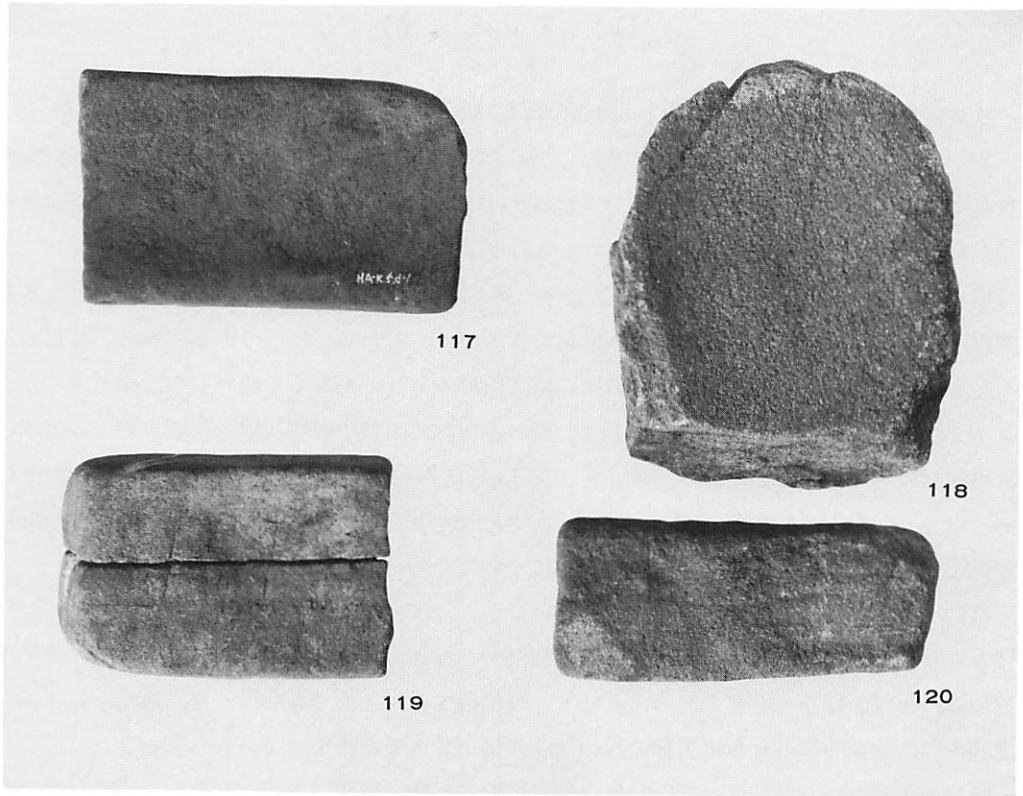
石斧・石のみ



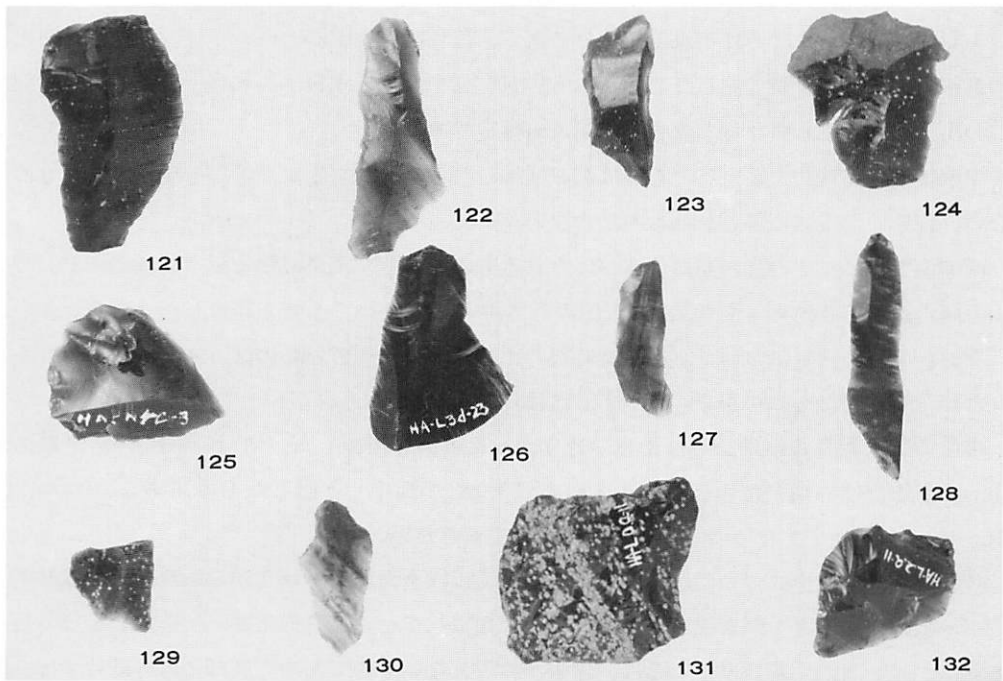
たたき石



すり石



砥石



加工痕や使用痕のある剥片

IV ま と め

試掘調査結果をもとに設定した、「調査のねらい」については、次のような結果を得た。

④について：続縄文時代の墓塚と予想したものは、出土した土器からすると、縄文時代晩期後葉に位置づけられることになった。平面形がほぼ円形を示す土塚は続縄文時代の墓塚に多く知られているが、本遺跡のものは土器による時期区分では縄文時代晩期後葉であるので、この時期にもみられることの一例となる。第2号～第14号の土塚は、10か所と3か所にまとまる墓塚群と思われるが、ほぼ同一の時期を推定できるので、あわせてひとつの墓塚群として把握することもできよう。墓塚と推定したものは、ほぼ円形であり、大きくて深いものは礫が多く、小さくて浅いものは礫が少ない傾向がある。礫のみられる土塚で埋葬状態を復原すると、遺体に直接礫がのっていることになる。第7号、第13号にみられるひときわ大きな礫も遺体の上にあったことになる。また第13号土塚では、大きな礫のまわりに2個体の土器が、わられた状態で出土した。墓塚と関連するであろう集落についての手がかりはつかめなかった。

⑤について：良好な包含層として残っていたところは少なく、遺物の出土もまばらであった。ほとんどの土器は磨耗しており、型式的な特徴をとらえて時期を確定できたものはごくわずかである。土器に伴う石器を組みあわせとして把握することはできなかった。遺構としては北筒式土器の時期と思われる楕円形の浅い皿状の第1号土塚を検出している(図6)。

時期の判明した資料には、縄文時代早期、中期、後期、晩期の土器があるが、中期後葉と晩期後葉のものが多く、早期の東釧路Ⅲ式土器(タンネトウE式)と魚骨回転文土器、中期の円筒上層式土器の破片はそれぞれ1個体分である。魚骨回転文土器については、以前、登別市富岸遺跡の報告書のなかで記したことがある(文献12)。東山5遺跡のものは、もっとも内陸部からの出土ということになる。魚骨の種類は未確定である。

中期後葉の北筒式土器としたものは調査区域にひろく分布するが、器形を復原できたものはない。後期の余市式土器としたものは少ない。

晩期の土器は、その終末期に位置づけられるものであり、東川町幌倉沼遺跡(文献19)や栗山町鳩山遺跡第3地点(文献23)、沢田の沢遺跡(文献28)の土器と類似したところが多い。

なお、事前の調査において、続縄文時代の土器片ととらえていたのは、今回の調査でもみられたが、磨耗したものが多く、明示するにはいたらなかった。

事前の試掘調査の結果からは予想できなかった遺構を検出した。M・N-3区の「土器の集中」、「石鏃だけの集中」、「石鏃とスクレイパーなどの集中」と記したものである(p.25、図24～30)。類例がすくないので幾分詳しく記しておきたい。

3個の土器の集中については、底部もふくめてほぼ全面に斜行縄文がみられ、鳩山遺跡第3地点、沢田の沢遺跡、幌倉沼遺跡出土のものに類似している。舟形土器についていえば、長軸方向につく一対の「耳」のところに、隆帯がみられないものである。底部のみの破片では、底部に縄文を施したのちに、沈線で、他の土器の頸部文様帯に類するものをほどこしている。3

個の土器は「入れ子」状態にあった可能性があるが、明らかにできなかった。縄文時代晩期終末に位置づけられる。

石鏃だけの集中については26点を実測図で示したが、そのうち22点はIA3と分類した二等辺三角形に近い形で無茎のものであり、1点はIA4と分類した茎のつくりの不明瞭なもの、2点はIA5と分類した茎のあるもの、1点は先端部破片である(図28・p.28の表)。図28の31と33は重さが5g以上あって、石鏃としてはきわめて大きいものになるが、素材、形態、つくり方など他のものと共通点が多いので石鏃に含めておく。石鏃の大きさについては、後にふれる。パラフィンと石膏とで固めてあるもののうちで、IA3と分類しうるものが、すくなくとも11点はある。

北海道の石器時代において、IA3と分類した二等辺三角形に近い無茎の石鏃が多く出土するのは、二つの時期が知られている。ひとつは縄文時代前期の尖底土器群にともなうものであり、他のひとつは、縄文時代晩期のタンネトウL式土器群から続縄文時代の後北式土器群にともなうものである。今回の調査では尖底土器の出土がみられないので、縄文時代前期に比定することはできない。IA3と分類しうる石鏃が10点以上まとまって出土した例は、縄文時代晩期では鳩山遺跡第3地点のピット(文献23)と沢田の沢遺跡pit1(文献30)、続縄文時代では元江別1遺跡の墓1、墓47、墓49、墓55(文献39)がある。

IA5と分類した茎のある石鏃(図28の36・37)は、縄文時代晩期の札苺遺跡(文献26)、聖山遺跡(文献37)、社台1遺跡(文献29)、志美第4遺跡(文献31)などで大洞系土器にともなって出土している。IA3とIA5の石鏃が共伴するのは、縄文時代晩期後半からであり、続縄文時代の中葉まで続いている。そしてIA3とIA5とがまとまって出土し、しかもIA3のものが圧倒的に多い例としては縄文時代晩期終末と続縄文時代に位置づけられる墓塚だけである。たとえば、沢田の沢遺跡のpit19(文献30)、元江別遺跡の墓19と墓65(文献39)、紅葉山33号遺跡の第1号小竪穴、第8号小竪穴、第9号小竪穴(文献38)などがある。これら3遺跡6遺構の石鏃を遺構ごとの重さの平均で比較してみると、元江別1遺跡と紅葉山33号遺跡のものはすべて1g以下であり、沢田の沢遺跡のものは2.5gである。本遺跡で石鏃だけの集中として図示したもののうち、破片を除く25点の平均は2.8gとなり沢田の沢遺跡のpit19例に近い値になる。以上述べたような石鏃の形態、形態の組み合わせの様子からすると、石鏃だけの集中というのは、縄文時代晩期後葉から続縄文時代中葉にいたる時間の幅のなかでとらえられる。さらに、きわめて大きな石鏃のまとまりの類例は、沢田の沢遺跡pit19が知られるので、縄文時代晩期終末に位置づけられるのではないか。

沢田の沢遺跡pit19例について、斉藤 傑は「実用品として製作されたのではなく、副葬を目的に製作されたものではないか」と述べている(文献30)。本遺跡の場合、墓塚における副葬品とはみなし難いが、石鏃としては大きすぎることや特殊な出土状態を考慮すると「実用品」としての可能性はひくい。

石鏃とスクレイパーなどの集中については5点を実測図で示したが、そのうち2点は両面加

工のスクレイパーであり、3点は剥片である(図30とp.31の表)。パラフィンと石膏とで固めてある残りのうち、すくなくとも5点はIA3と分類しうる石鏃である。この二等辺三角形に近い形で無茎の石鏃が、縄文時代晩期から続縄文時代にわたる時期にみられることは、上に述べたところである。

図30の39のような幅広い茎をつくりだした両面加工のスクレイパーは、縄文時代晩期から続縄文時代の遺跡に多くみられる。たとえば縄文時代晩期では、志美第1遺跡、志美第3遺跡(文献31)、沢田の沢遺跡、タンネトウ遺跡A発掘区(文献10)、続縄文時代では、紅葉山33号遺跡(文献38)、元江別1遺跡(文献39)、旧豊平河^{きゆうとよひら}畔^{かはん}遺跡(文献39)、江別太^{えべつよと}遺跡(文献40)などである。

名称としてこれまで「石匙」「石小刀」「靴型石筥」「石製ナイフ」「石ナイフ」などと呼ばれてきたことは木村英明(文献38)の指摘するとおりである。石器の形態は、製作のはじめには長軸方向の中心線を軸として左右対象につくられるのであろうが、使用によるすりへり、刃部の再生の繰り返しなどによって刃部の形にはいろいろなものがある。江別太遺跡で木製の柄に着いたまま出土した例からすると、幅広い茎は木製の柄との接着部にあたる。39の場合、使用による刃部のすりへりは認めにくい。

図30の43は、幅広い茎とほぼ全周にわたる両面加工がみられるので、39の大形としてとらえられるであろう。それにしても他の類品と比べても並はずれて大きい。両面加工のスクレイパーとIA3に分類しうる石鏃から推定できる時代的な位置づけは、縄文時代晩期後葉から続縄文時代中葉の幅のなかに求められる。

以上、土器の集中は縄文時代晩期終末に、石鏃だけの集中は縄文時代晩期終末の可能性が高いこと、石鏃とスクレイパーなどの集中は、縄文時代晩期後葉から続縄文時代中葉の幅の中に位置づけられることを述べてきた。それぞれの集中はわずか3m以内のところにみられ、周辺に異なる時期を思わせる遺構、遺物も見あたらないので、三つの遺物の集中は、縄文時代晩期終末に位置づけてよいであろう。

墓塚以外のところから石器がまとまって出土した例としては、縄文時代晩期後葉と考えられるママチ遺跡の「石鏃の集積」「石斧の集積」「剥片石器の集積」が知られている。そのうち「剥片石器の集積」は、幅7cm長さ20cmの範囲から出土しており、容器に入ったまま置かれていた様子が推定できる(文献34)。

今回の東山5遺跡では、墓塚に関連する副葬品として指摘しうる石器は認められず、墓塚とはへだたったところに、石鏃だけの集中、石鏃とスクレイパーなどの集中がみられ、ともに、袋状のものに入ったまま置かれた状態である。このような遺物の出土状態は類例が少ないので、今後の検討を考慮してパラフィンと石膏で固めてとりあげてある。遺物の集中は黒色土のなかに認められており、周囲の精査にもかかわらず掘り込みの様子などは、明らかにできなかったが、おそらく、掘りくぼめた中に納められたものであろう。墓塚とは異なる埋納遺構としてとらえておきたい。

(文責 西田 茂)

参考資料

C₁₄年代測定結果

測定年月	昭和 56 年 12 月
測定者	京都産業大学理学部 山田 治
試料名称	木炭（第 13 号土壌より採取）
C ₁₄ 半減期	5.568 年
測定結果	2,710±120B.P. (KSU-448)

参考文献

- 1 「岩見沢の先史時代」 菊地豊吉 1963 『岩見沢市史』所収
- 2 『岩見沢市 冷水遺跡』 富水慶一 1976 岩見沢市教育委員会
- 3 「岩見沢市内遺跡出土の遺物」 富水慶一 1979 『岩見沢市の埋蔵文化財第 2 輯』
- 4 『栗山町の文化財』 1964 栗山町教育委員会
- 5 『空知の文化財 第 1 集』 野村 崇他 1969
- 6 「石狩川中流域の先史遺跡」 野村 崇他 1977 『空知文化財シリーズ第 6 集』
- 7 『北海道の考古学 1・2』 宇田川洋 1977
- 8 『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』 1979 北海道教育委員会
- 9 『北海道考古学講座』 野村 崇・菊池俊彦編 1980
- 10 『長沼町幌内タンネトウ遺跡の発掘調査』 野村 崇他 1977 空知地方史研究協議会
- 11 『東釧路』 河野広道・沢四郎他 1962 釧路市教育委員会
- 12 「富岸遺跡」 西田 茂他 1981 『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第一集』
所収
- 13 『吉井の沢 1 遺跡』 概報 1981 財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 14 「美々 5 遺跡」 1979 北海道教育委員会 『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』 所収
- 15 「北筒式土器」 桑原 護 1966 『考古学雑誌』 51-4
- 16 「余市式土器」 桑原 護 1968 『考古学雑誌』 54-1
- 17 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」 大沼忠春 1981
『考古学雑誌』 66-4
- 18 「北海道の墳墓の問題点」 藤本英夫 1966 『幌倉沼の墳墓』 所収
- 19 『柏木 B 遺跡』 木村英明他 1981 恵庭市教育委員会
- 20 「美沢 1 遺跡」 1979 北海道教育委員会 『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』 所収
- 21 『幌倉沼の墳墓』 佐藤忠雄他 1966 上川郡東川町教育委員会
- 22 「馬追丘陵発見の三個の土器」 野村 崇 1967 『北海道考古学』 第 3 輯

- 23 「北海道栗山町鳩山の墳墓遺跡」 野村 崇 1965 『石器時代』第7号
- 24 『妹背牛町メム川遺跡』 高橋稀一、野村 崇 1972 雨龍郡妹背牛町教育委員会
- 25 「大狩部第一地点の墳墓遺跡」 藤本英夫 1960
- 26 『札幌一北海道上磯郡木古内町における縄文時代晩期土壙墓の調査一』1976 北海道開拓記念館
- 27 「栗山町鳩山遺跡第V地点出土の遺物」 富水慶一 1977 『北海道考古学』第13輯
- 28 『富良野市鳥沼遺跡』 1977 富良野市
- 29 「社台1遺跡」 種市幸生他 1981 『(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第一集』所収
- 30 『東神楽町沢田の沢遺跡発掘調査報告』 齊藤 傑 1981 東神楽町教育委員会
- 31 『SHIBISHIUSU II』 石橋孝夫他 1979 石狩町教育委員会
- 32 『深川市東納内2遺跡発掘調査報告書』 中村福彦・福田友之 1977 北海道教育委員会
- 33 『柏木川』 高橋正勝編 1971 北海道文化財保護協会
- 34 『ママチ遺跡』 1971 北海道千歳考古学研究会、千歳市教育委員会
- 35 『あびら』 佐藤忠雄他 1976 早来町教育委員会
- 36 『聖山』 吉崎昌一編 1979 七飯町教育委員会
- 37 『峠下聖山遺跡』 芹沢長介他 1979 七飯町教育委員会
- 38 『続縄文時代の墓壙群の研究—石狩町紅葉山33号遺跡の例—』 木村英明 1975 石狩町教育委員会
- 39 『元江別遺跡群』 高橋正勝他 1981 江別市教育委員会
- 40 『江別太遺跡』 高橋正勝他 1979 江別市教育委員会
- 41 『瀬棚南川遺跡』 高橋和樹他 1976 瀬棚町教育委員会



(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第4集

東山5遺跡

—— 北海道縦貫自動車道岩見沢地区
埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

昭和57年3月25日発行

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南15条西17丁目

TEL. (011)561-0067

印刷 (協) 高速印刷センター

061-24 札幌市西区手稲稲穂472

TEL. (011)683-2231
